

八日市場市平木遺跡

— 県立海匝地区(仮称)養護学校建設に伴う埋蔵文化財調査 —

1 9 8 8

千葉県教育厅施設課
財団法人千葉県文化財センター

八日市場市平木遺跡

— 県立海匝地区(仮称)養護学校建設に伴う埋蔵文化財調査 —

1 9 8 8

千葉県教育厅施設課
財團法人 千葉県文化財センター

序 文

千葉県の北東部に位置する八日市場市は、九十九里浜に面して自然条件に恵まれており、数多くの遺跡が所在しております。なかでも縄文時代の丸木舟は全国的に著名なものです。

このたび千葉県では、八日市場市に千葉県立海匝地区（仮称）養護学校を建設することになりました。

千葉県教育委員会では、予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、関係機関と慎重に協議を重ねた結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存の措置を講じることになり、昭和62年4月8日から6月30日まで調査を行ないました。

発掘調査の結果、平安時代の住居跡群をはじめ多數の遺構・遺物が検出され、なかでも『郡厨』他の多量の墨書き土器は極めて重要なものです。これらの調査成果は、古代匝瑳郡を解明する上で貴重な資料になるものと思われます。

このたび、その調査成果を報告書として刊行することになりました。本書が学術資料としてはもとより、文化財の保護・普及のために広く一般の方々に活用されることを願ってやみません。

終りに、発掘調査から報告書刊行に至るまで種々御指導いただいた千葉県教育庁文化課をはじめ、千葉県教育庁施設課、並びに地元関係機関各位の御協力に対し厚く御礼申し上げるとともに、調査及び整理に従事された調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

昭和63年3月

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 山本孝也

凡　　例

1. 本書は、千葉県八日市場市平木における平木（ひらぎ）遺跡の発掘調査報告書である。
2. この調査は、千葉県立海匝地区（仮称）養護学校の建設に伴う調査として、千葉県教育委員会の委託を受けた財団法人千葉県文化財センターが、千葉県教育庁文化課の指導のもとに実施したものである。
3. 発掘調査及び整理作業は、調査部長堀部昭夫、同部長補佐古内茂の指導のもとに、班長矢戸三男の助言を得て、下記の職員がこれにあたった。
発掘調査（昭和62年4月8日～6月30日）
主任調査研究員 小久賀隆史（4月～6月）調査研究員 麻生正信（5～6月）
整理作業（昭和62年10月1日～昭和63年1月31日）
主任調査研究員 小久賀隆史（11月～1月）調査研究員 海老原充（10月）
4. 本書の執筆及び編集は小久賀が行なった。なお貝層サンプルの分類については、班長小宮益の教示を得た。また墨書き器の判読については、主任調査研究員栗田則久の協力を得て、国立歴史民俗博物館助教授平川南氏の御教示を賜わった。なお遺物写真は調査研究員田形孝一および小久賀が撮影した。なお整理作業全体にわたって、栗田則久・田形孝一の協力を得た。
5. 本書に使用した航空写真は、京葉測量株式会社の提供によるものである。
6. 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁施設課、千葉県土地開発公社、千葉県教育庁文化課、八日市場市教育委員会の関係諸機関をはじめ、地元の方々、工事関係の方々など多くの方々から御指導・御協力を賜わりました。ここに深く謝意を表します。
7. 本書においては遺構名を以下のように略記している。SI=竪穴住居跡、SE=井戸、SB=掘立柱建物跡、SD=溝、SX=性格不明及び特殊な遺構
10. 遺構の縮尺は、住居跡などの個別の遺構実測図は1/80、溝などの集成した遺構実測図は1/160で統一してあるが、一部任意の縮尺のものがあり、その旨表示した。
11. 方位はすべて座標北である。
12. 遺物の縮尺は、土器は1/4で統一してあるが、その他は任意の縮尺であり、その旨表示した。

13. 土器実測図のうち、底部の切り離し・調整技法は、拓本を示したもの以外は、以下の分類で表記した。

- | | |
|----------|--------------|
| A 回転糸切り | 1 全面回転ヘラケズリ |
| B 静止糸切り | 2 全面手持ちヘラケズリ |
| C 回転ヘラ切り | 3 周縁回転ヘラケズリ |
| D 不明 | 4 周縁手持ちヘラケズリ |
| | 5 無調整 |

14. 土器実測図のうち、断面黒塗りのものは須恵器、目の粗いスクリーントーンは内黒土器、目の細かいスクリーントーンは赤彩土器を示す。

目 次

序文

凡例

I. 調査の概要

1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の方法と経過	1

II. 遺跡の概要

1. 遺跡の位置と地形・層序	4
2. 周辺の遺跡	5

III. 遺構

1. 住居跡	6
2. 井戸	9
3. 捜立柱建物跡	12
4. 溝	19
5. その他の遺構	35

IV. 遺物

1. 土器	39
2. その他の遺物	55
3. 貝層サンプル出土の貝類資料	66

V. まとめ

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)	2
第2図 遺跡地形図 (1/5,000)	3
第3図 層序	4
第4図 SI 1、2、3	7
第5図 SI 4・5、6	8
第6図 SE 1、2 (1/40)	9
第7図 SE 3 (1/40)	10
第8図 SE 4 (1/40)	11
第9図 SB 1、2	12
第10図 SB 3	13

第11図 SB 4	14
第12図 SB 5	15
第13図 SB 6	16
第14図 SB 7	17
第15図 遺構配置図区画図 (1/1,000)	18
第16図 遺構配置図 1	19
第17図 遺構配置図 2	20
第18図 遺構配置図 3	21
第19図 遺構配置図 4	22
第20図 遺構配置図 5	23
第21図 遺構配置図 6	24
第22図 遺構配置図 7	25
第23図 遺構配置図 8	26
第24図 遺構配置図 9	27
第25図 遺構配置図10	28
第26図 遺構配置図11	29
第27図 遺構配置図12	30
第28図 遺構配置図13	31
第29図 遺構配置図14	32
第30図 遺構配置図15	33
第31図 遺構配置図16	34
第32図 SX 1 (1/100)	36
第33図 SX 2 (1/40)	37
第34図 SX 3	38
第35図 SI 1 ~ 6 出土土器	39
第36図 SE 1 出土土器	40
第37図 SE 4 出土土器 (1)	41
第38図 SE 4 出土土器 (2)	42
第39図 SE 4 出土土器 (3)	43
第40図 SE 4 出土土器 (4)	44
第41図 SD 1・2 出土土器	46
第42図 SD 5 出土土器	47
第43図 SD 6・7・13・15・16・17出土土器	48

第44図 SD 9 出土土器 (1)	49
第45図 SD 9 出土土器 (2)	50
第46図 SD10出土土器 (1)	51
第47図 SD10出土土器 (2)	52
第48図 SD11出土土器	54
第49図 その他の溝出土土器	55
第50図 SX 1 出土土器	56
第51図 SX 2 出土土器	57
第52図 SX 3 出土土器 (1)	58
第53図 SX 3 出土土器 (2)	59
第54図 SX 3 出土土器 (3)	60
第55図 SR 1 出土土器	60
第56図 遺構外出土土器 (1)	61
第57図 遺構外出土土器 (2)	62
第58図 遺構外出土土器 (3)	63
第59図 土製品・石製品 (1/2)	65
第60図 古銭 (1/1)	66
第61図 チョウセンハマグリ・ダンペイキサゴ・フジノハナガイの計測結果	68
第62図 遺構分布図 (1/500)	卷末折込

図 版 目 次

- 図版1 遺跡周辺航空写真 (1/10,000)
- 図版2 1. 調査前遺跡近景 2. 調査前遺跡近景
- 図版3 1. SI1 2. SI2
- 図版4 1. SI3 2. SI4・5
- 図版5 1. SI6 2. SE1
- 図版6 1. SE2 2. SE3
- 図版7 1. SE4 土器出土状況 2. SE4
- 図版8 1. SB1、2、3 2. SB4、5
- 図版9 1. SB6、7 2. SD6
- 図版10 1. SE3周辺 2. SX1、敵状小溝周辺
- 図版11 1. SD3、4周辺 2. SD5周辺
- 図版12 1. SD7、8、12 2. SD9、10、11

- 図版13 1. SD1 土器出土状況 2. SD5 土器出土状況
- 図版14 1. SD5 土器出土状況 2. SD9 土器出土状況
- 図版15 1. SX1 北半 2. SX1 南半
- 図版16 1. SX2 2. SX3
- 図版17 出土土器
- 図版18 出土土器
- 図版19 出土土器
- 図版20 出土土器
- 図版21 出土土器
- 図版22 出土土器
- 図版23 出土土器
- 図版24 出土土器
- 図版25 出土土器
- 図版26 出土土器（墨書き）
- 図版27 1. 繩文式土器 2. その他の遺物

I. 調査の概要

1. 発掘調査に至る経緯

千葉県では、県内各地区に養護学校の建設を進めており、海匝地区の養護学校予定地として八日市場市平木地区が候補となつた。これに伴い千葉県教育庁文化課に予定地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会があり、現地踏査を実施したところ、予定地が平安時代の包蔵地であることを確認し、その旨を回答した。

その後、この遺跡の取扱いについて関係機関と慎重に協議を重ねたが、代替用地のめどが立たないこと、また、開校時期の問題等の条件があり、やむを得ず記録保存の措置をとることになり、当センターが発掘調査を実施することになった。

2. 調査の方法と経過

平木遺跡の調査は、昭和62年4月8日から6月30日にわたって実施した。調査対象面積は16,500m²で、10%の確認調査の結果に基づき本調査を実施した。本調査面積は6,900m²である。以下、調査の方法と経過について記載する。

4月8日に現地に入り、器材の搬入、設営等諸準備の後、発掘区の設定を行ない、確認調査を開始した。調査地の大半は植木畠となつておらず、その撤去が遅れたことにより、基準点測量が実施できなかつたため、用地の基準点（任意座標）をもとに基本杭を設定し、最終的に国土方眼座標に変換する方式を採用した。基本杭は40mピッチで設定し、この区画を大グリッドとし、その中をさらに4mメッシュで区切り、これを小グリッドとした。確認調査ではこの小グリッドのうち2×4mの部分で遺構・遺物の検出を行なつた。遺構の記録や遺物の取り上げは、すべてこのグリッドを使用し、記載に当たつては、大グリッドと小グリッドの地区名を組合せ、たとえば4C-82というように記録した。前述のように植木等の撤去が遅れており、撤去できた部分から順次確認調査を行なっていくという状況であった。また撤去に伴つて調査地はかなり荒らされており、抜根、擾乱層の除去等で、確認調査においても重機を併用している。5月11日に確認調査が終了する。その結果対象地のうち、削平された部分、水田・河川等を埋め立てた部分があることが判明し、さらに擾乱されている部分を除き、本調査の範囲が決定した。

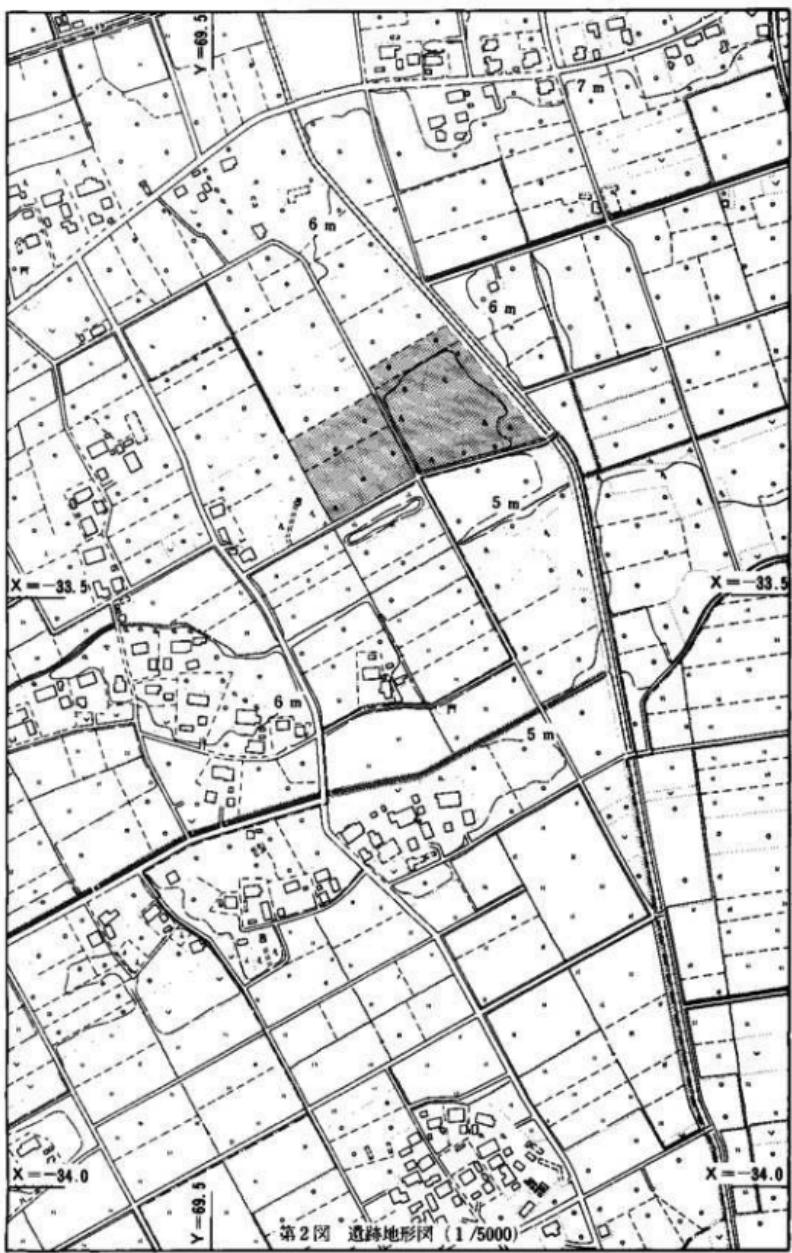
5月12日から遺跡東側部分の表土の除去を行ない、遺構の精査に着手した。溝2条の調査の後、遺構の密な西側部分の調査を先行することになった。この部分は多くの溝が検出されたため、予想外の時間を費やした。また井戸は湧水が激しく、排水に多くの労力を費やした。

6月11日から東側部分の調査を再開し、住居跡、溝、貝層等が検出された。この部分は乾燥が著しく、散水を行ないながら調査を行なつた。

6月29日までにすべての遺構の精査、実測、撮影を完了する。6月30日に現場の撤収を行



第1図 遺跡の位置と周辺の道路 (1/25,000)



第2図 道路地形図 (1/5000)

ない、調査を終了した。

II. 遺跡の概要

1. 遺跡の位置と地形・層序（第1～3図）

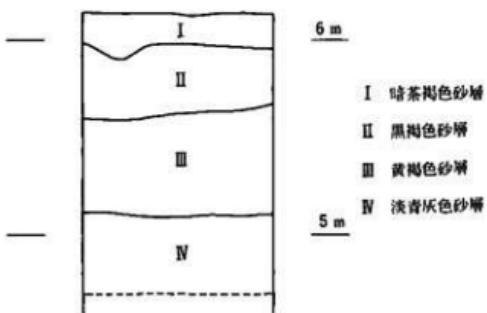
平木遺跡は、千葉県八日市場市平木字大六天965-1他に所在する遺跡である。八日市場市は千葉県の北東部に位置し、九十九里地域の北部にあたる地域である。この地域の地形は、木戸川及びその支流によって樹枝状に開拓された下総台地と、砂州や低地からなる海岸平野とによって構成されている。九十九里平野の北部は、特に木戸低地と呼ばれ、砂州（砂堆）、堤間低地、後背低地などで構成されている低地である。低地面上には、海岸線に沿って10数列の砂州が分布しており、第I～第III砂州群（砂堤群）に分けられている。第I砂州群は縄文時代中期、第II砂州群は縄文時代後期、そして第III砂州群は古墳時代にそれぞれ形成されたと言われている。遺跡はこの第II砂州群上に立地している。現在の海岸線まで直線距離にして約3.8kmである。今回の調査範囲は東西約180m、南北約90mで、標高約6mを測り、地形はほぼ平坦である。層序は第3図のとおりである。

I 暗茶褐色砂層（表土層）

II 黒褐色砂層

III 黄褐色砂層

IV 淡青灰色砂層



第3図 層序

2. 周辺の遺跡（第1図）

八日市場市域の地形は大きく3つに分類される。①かつての海・沼などの低地部分、②砂丘などの微高地部分、③台地・丘陵部分である。このうち台地・丘陵部分では、古くから遺跡の存在が知られ、発掘調査が行なわれてきた地域である。また低地部分でも丸木舟の出土を契機として発掘調査が行なわれてきた。しかし、砂丘などの微高地部分については、一部で遺跡の存在が知られていたが、遺跡の時期・範囲等の実態は必ずしも明らかではなかった。ところが近年行なわれた組織的な分布調査によって、微高地上の遺跡の範囲・時期等も明らかになってきた。それによると、本遺跡の周辺の微高地上には多くの遺跡が分布しており、その密度は台地上の遺跡分布に匹敵するほどである。これらの遺跡の時期は平安時代を中心であり、古代匝瑳郡の18郷のうち約半数がいわゆる木戸低地上に存在したことを考え合わせると、極めて興味深いものがある。調査例もなく、個々の遺跡の実態はなお明らかでないが、微高地上の遺跡の実態を解明することは、古代匝瑳郡を考える上で、また古代の開発を考える上で、極めて重要な鍵を握っていると言えよう。

III. 遺構

1. 住居跡

今回の調査では6軒の住居跡を検出した。台地上で通常検出される住居跡と異なり、床面や柱穴等の住居の諸施設は十分とらえることができなかった。6軒の住居跡の中には、やや疑問の残るものもあるが、こうした巖高地上における住居跡の検出例がほとんどなく、比較・検討することができないので、ここでは6軒すべてを住居跡として報告しておきたい。

S I 1 (第4図)

東区のほぼ中央に位置する住居跡で、SD 2に切られている。プランは $4.2 \times 3.9\text{m}$ のやや長方形を呈する。壁の遺存は極めて悪く、やや傾斜を持って立ち上がり、壁高は $0.2 \sim 0.3\text{m}$ を測る。壁溝・ビットは検出されず、床面の硬化面も存在しない。カマドは北壁のやや西壁寄りに構築されているが、壁への掘込みは認められるものの、通常認められる構築材は存在せず、火床部や焼土は検出されなかった。覆土は2層に分けられた。出土遺物は少なく、3点が図示できただけである。

S I 2 (第4図)

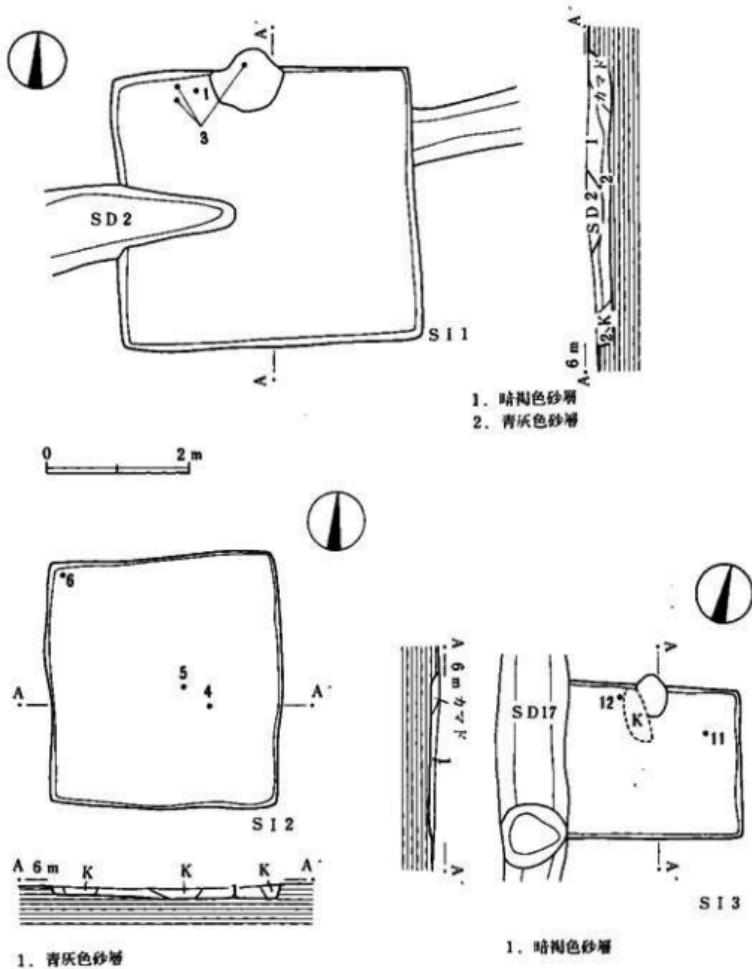
S I 1 の東 4.5m に位置する住居跡である。プランは $3.5 \times 3.3\text{m}$ のやや長方形を呈するが、全体に擾乱が著しい。壁の遺存は極めて悪く、やや傾斜を持って立ち上がり、壁高は $0.1 \sim 0.2\text{m}$ を測る。壁溝・ビットは検出されず、床面の硬化面も存在しない。またカマドも検出されなかった。覆土は単一層であった。出土遺物は少ないが、6点を図示することができた。

S I 3 (第4図)

東区の南側に位置する住居跡で、SD 17に切られている。プランは $2.5 \times 2.1\text{m}$ のやや長方形を呈する。壁の遺存は極めて悪く、やや傾斜を持って立ち上がり、壁高は 0.05m を測る。壁溝・ビットは検出されず、床面の硬化面も存在しない。カマドは北壁の中央に構築されており、若干の焼土が堆積していた。覆土は単一層であった。出土遺物は少なく、4点の甕が図示できただけである。10と13はカマド内から出土したものである。

S I 4 (第5図)

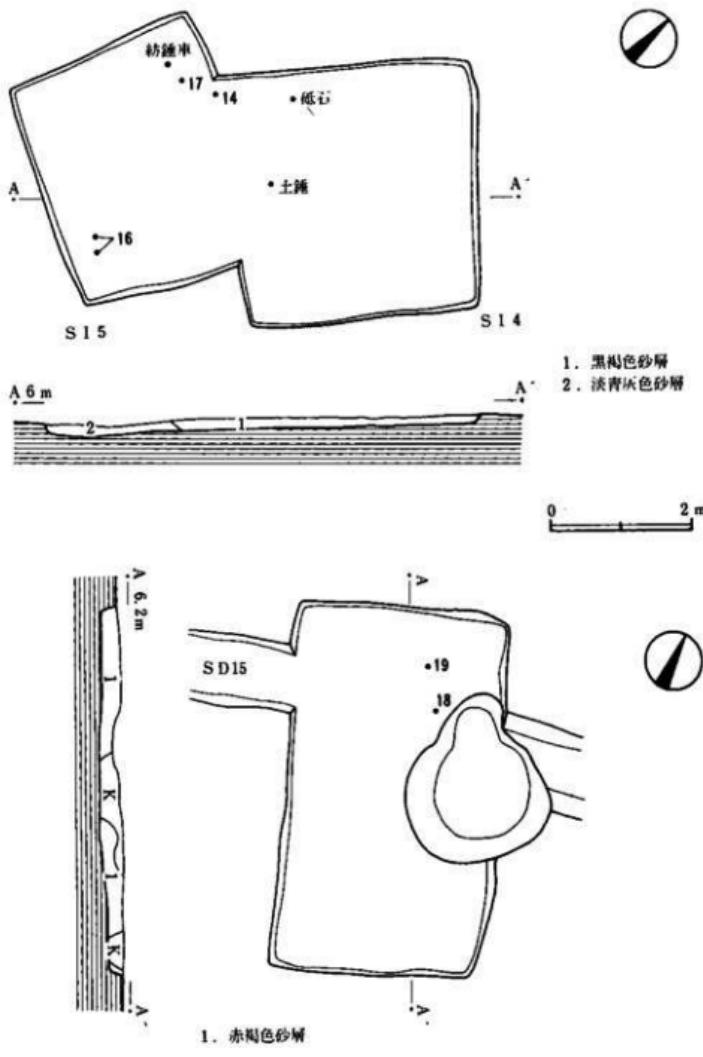
S I 3 の東 20m に位置する住居跡である。西側でS I 5と重複しているが、土層断面からは新旧関係をとらえることはできなかった。プランは一辺が約 3.5m のほぼ正方形を呈する。壁の遺存は極めて悪く、やや傾斜を持って立ち上がり、壁高は 0.1m を測る。壁溝・ビットは検出されず、床面の硬化面も存在しない。またカマドも検出されなかった。出土遺物は少なく、甕が1点図示できた地、砥石と土鍤が出土している。



第4図 S11, 2, 3

S15 (第5図)

S14と重複する住居跡である。プランは $3.5 \times 2.8\text{m}$ の長方形を呈する。壁の遺存は悪く、やや傾斜を持って立ち上がり、壁高は 0.1m を測る。壁・ピットは検出されず、床面の硬化面も存在しない。またカマドも検出されなかった。出土遺物は少なく、土器3点が実測できた他、紡錘車が出土している。



第5図 S 14・5, 6

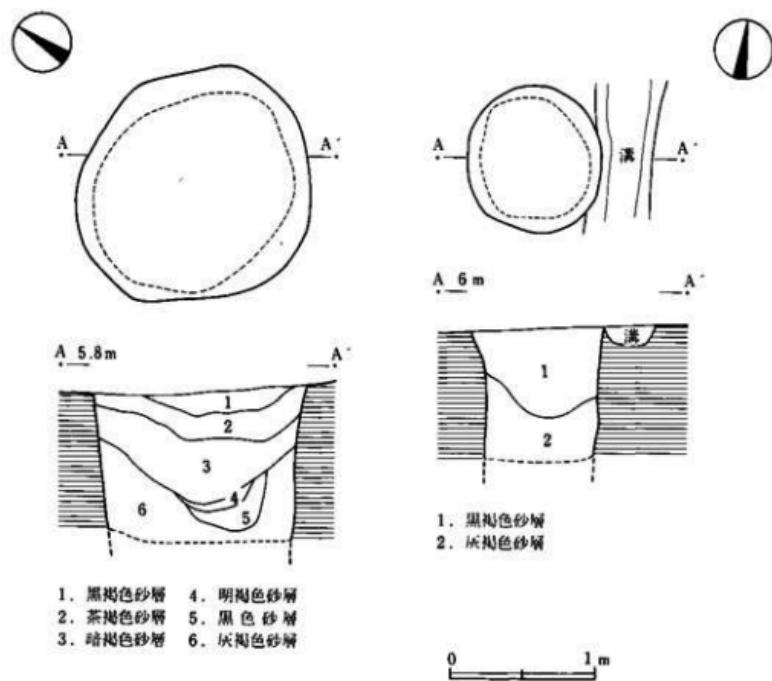
S I 6 (第5図)

S I 3 の北西18mに位置する住居跡である。プランは $6.4 \times 3.9\text{ m}$ の長方形を呈する。壁の遺存は極めて悪く、やや傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.25mを測る。壁溝・ピットは検出されず、床面の硬化面も存在しない。またカマドも検出されなかった。出土遺物は少なく、2点の土器が図示できただけである。

2. 井戸

S E 1 (第6図)

西区の南側に位置する。確認面では径約1.6mの不整な円形を呈する。深さは1m以上を測る。調査は井戸内の堆積土層をとるべく、西半を掘り下げたが、湧水と壁の崩壊の危険性が生じたため、底面まで掘り下げることはできなかった。おそらく1.5m以上の井戸であったと思われる。井戸内は深さを増すにつれてやや径が小さくなる。記録した土層は6層に分けられた。出土遺物は少なく、覆土中からわずかな土器片が出土しただけ、図示できたのは2点だけである。



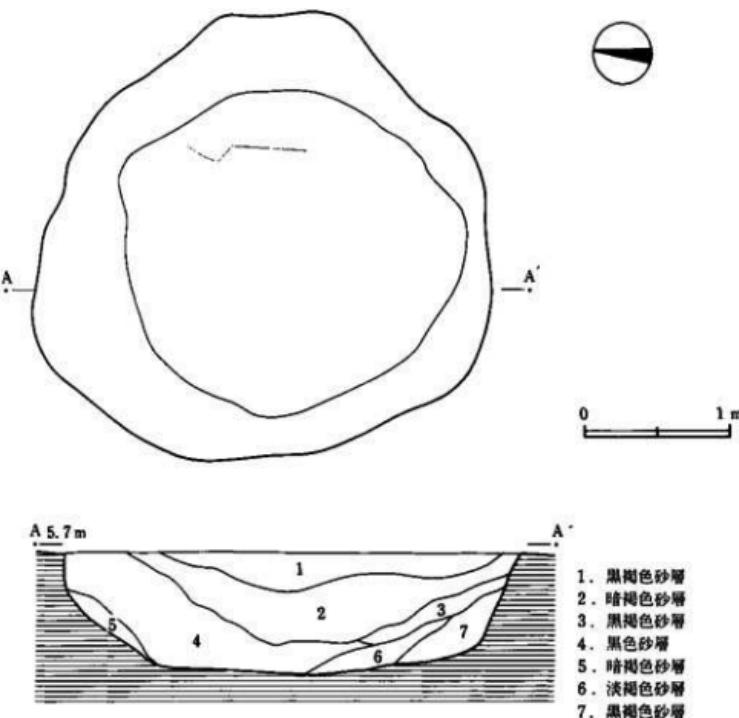
第6図 S E 1, 2 (1/40)

SE 2 (第6図)

SE 1の北西10mに位置する。確認面では径約0.9mの円形を呈する。深さは0.9m以上を測る。SE 1と同様に、湧水と壁の崩壊の危険性が生じたため、底面まで掘り下げることはできなかった。おそらく1.5m以上の井戸であったと思われる。井戸内は深さを増すにつれてやや径が小さくなる。記録した土層は2層に分けられた。出土遺物は少なく、覆土中からわずかな土器片が出土しただけで、図示できるものはない。

SE 3 (第7図)

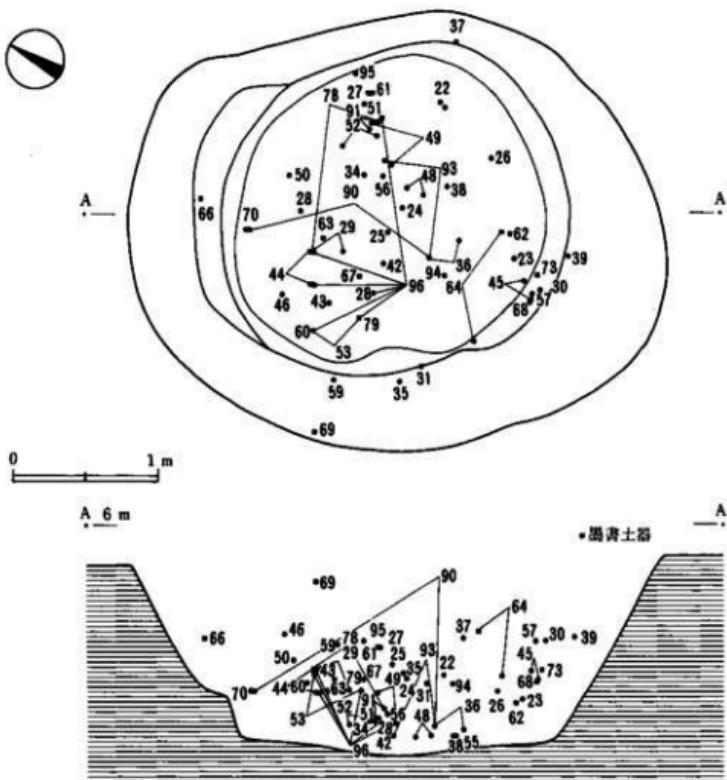
SE 2の北西10mに位置する。確認面では径約3mの不整な円形を呈する。深さは0.8mを測る。井戸内は深さが増すにつれてやや径が小さくなり、底面では 2.8×2.2 mの長円形を呈する。覆土は7層に分けられた。出土遺物は少なく、覆土中からわずかな土器片が出土しただけで、図示できるものはない。



第7図 SE 3 (1/40)

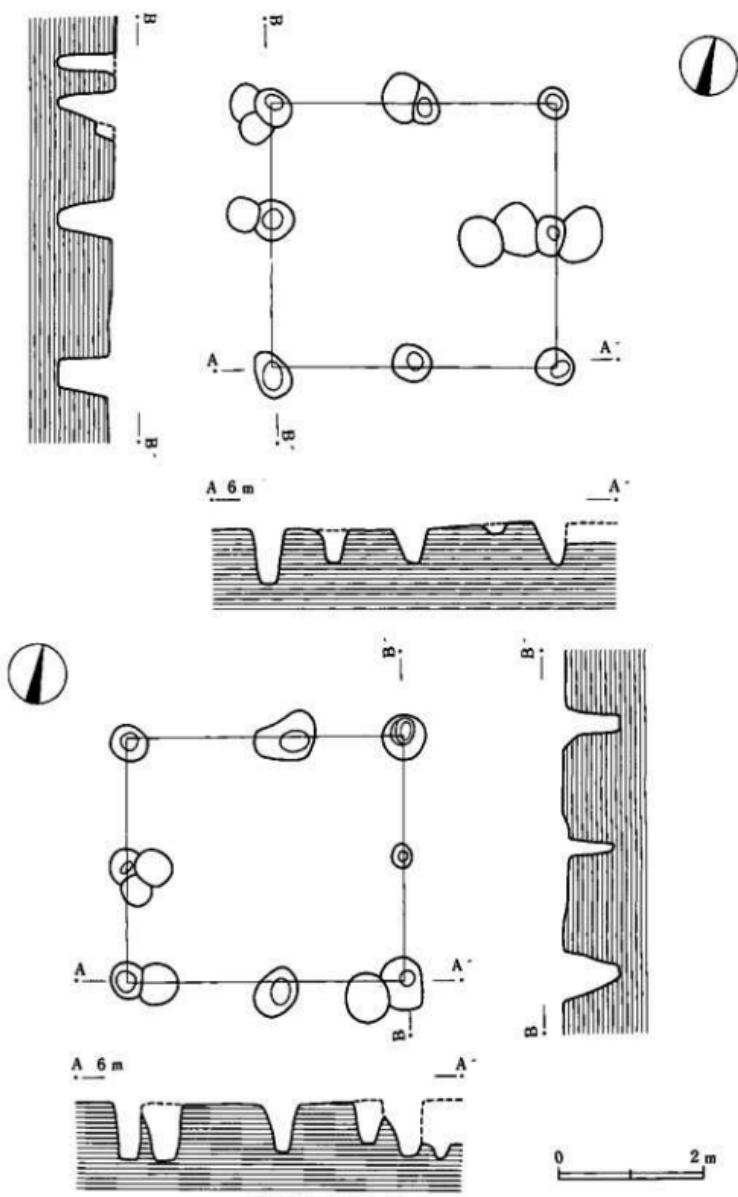
SE 4 (第8図)

SE 1の南2mに位置する。確認面では3.7×3mの長円形を呈する。深さは1.3mを測る。井戸内は深さが増すにつれて径が小さくなり、底面では径約2mのやや不整な円形を呈する。北側の壁面には段がある。覆土は、有効な位置にセクションベルトを設定できなかったため、図示できないが、2層程度にしか分けられないものである。出土遺物は極めて多く、覆土中位以下から多量の土器が出土している。大半は土師器の坏で、完形品に近いものが多く、また墨書き土器も多い。



第8図 SE 4 (1/40)

3. 掘立柱建物跡



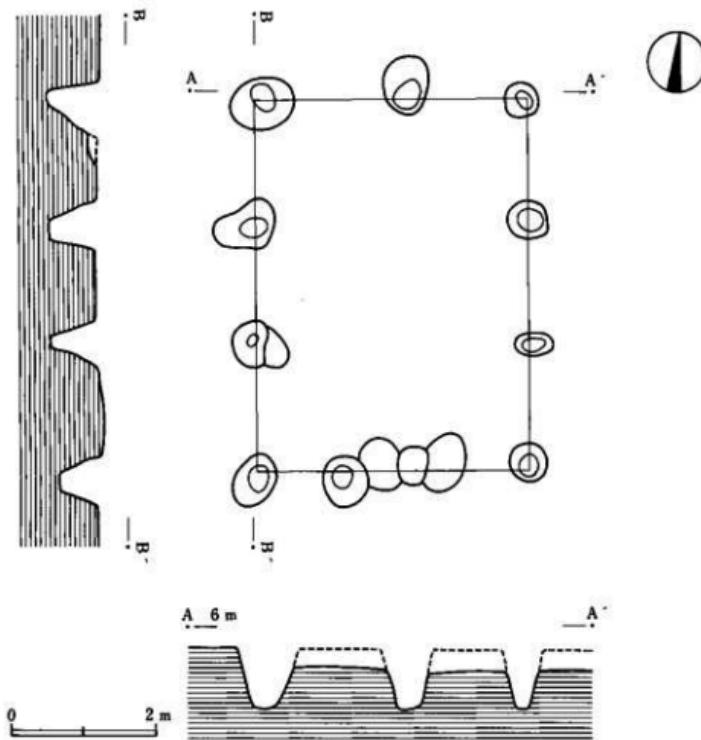
第9図 SB 1, 2

SB 1 (第9図)

西区の西側に位置し、SB 2、SB 3と重複するが、調査段階では新旧関係を明らかにすることはできなかった。N-12.5°-Wに主軸をとる2間(3.6m)×2間(4m)の掘立柱建物跡である。掘方は不整な円形を呈し、径は0.5m前後であるが、深さは0.45~0.7mと差がある。柱痕は検出されなかった。

SB 2 (第9図)

SB 1、SB 3と重複するが、新旧関係は不明である。N-10°-Wに主軸をとる2間(3.3m)×2間(3.8m)の掘立柱建物跡である。掘方は不整な円形を呈し、径は0.3~0.7mと差があるが、深さは0.8m前後である。柱痕は検出されなかった。



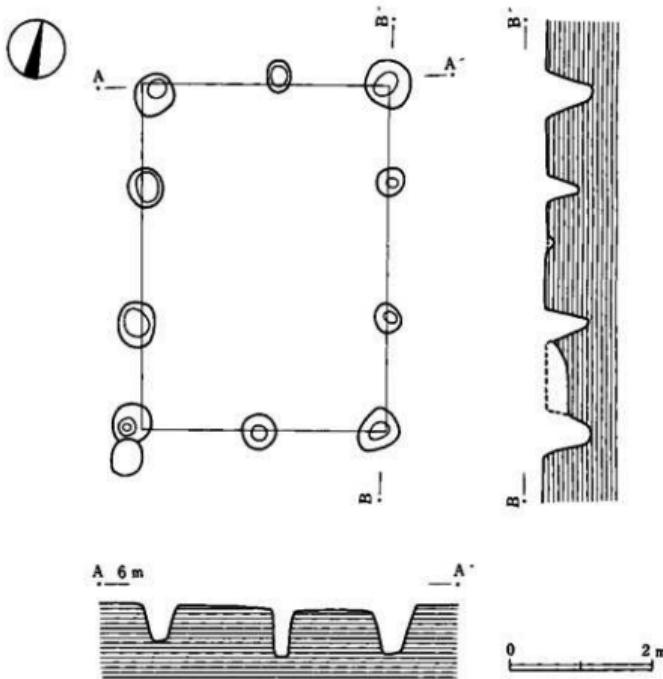
第10図 SB 3

S B 3 (第10図)

S B 1、S B 2 と重複するが、新旧関係は不明である。N-5.5°-Wに主軸をとる2間(3.8m)×3間(5.0m)の南北棟の掘立柱建物跡である。掘方は不整な円形を呈し、径は0.5~0.7mと差があり、深さも0.6~0.8mとやや差がある。柱痕は検出されなかった。

S B 4 (第11図)

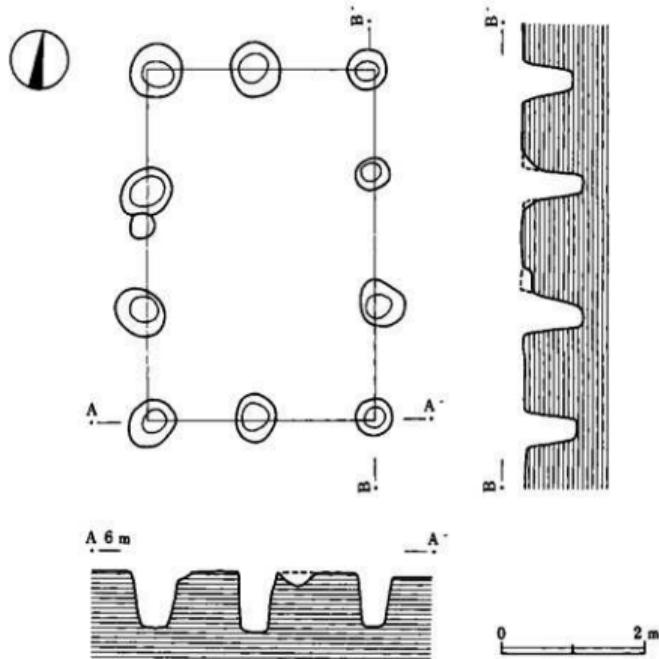
S B 3 の北東に位置する。N-12°-Wに主軸をとる2間(3.4m)×3間(4.7m)の南北棟の掘立柱建物跡である。掘方は不整な円形を呈し、径は0.4~0.65m、深さも0.5~0.7mと差がある。柱痕は検出されなかった。



第11図 S B 4

S B 5 (第12図)

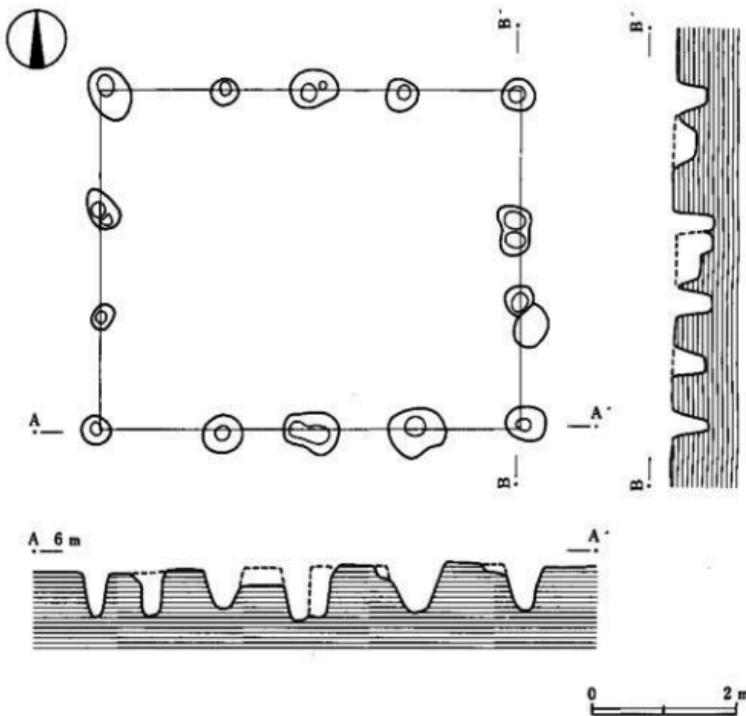
S B 4 の北東に位置する。N - 6° - W に主軸をとる 2 間 (3.2 m) × 3 間 (4.8 m) の南北棟の掘立柱建物跡である。掘方は不整な円形を呈するが、径は 0.6 m 前後、深さは 0.7 m 前後の比較的しっかりしたものである。柱痕は検出されなかった。



第12図 S B 5

S B 6 (第13図)

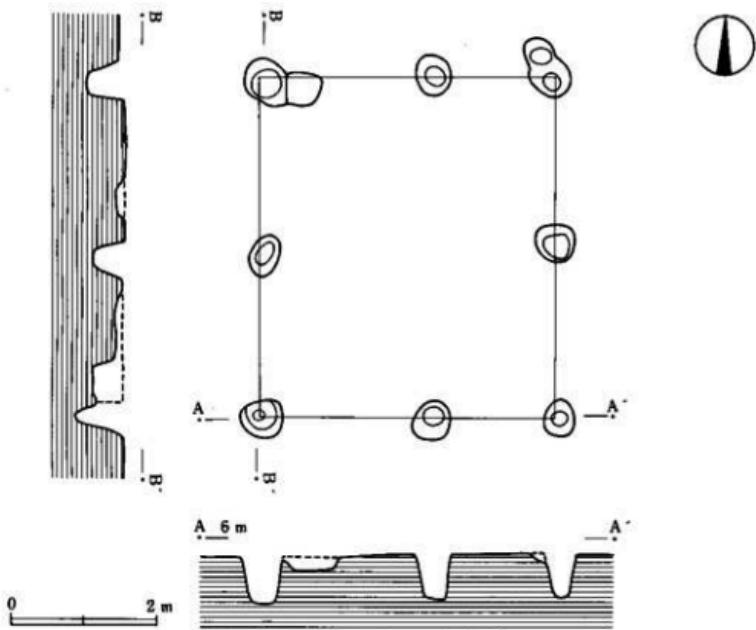
S B 5 の北西に位置する。S B 7 と重複するが、新旧関係は不明である。N - 2° - E に主軸をとる 3間 (4.5m) × 4間 (5.8m) の東西棟の掘立柱建物跡である。掘方は不整な円形を呈し、径は 0.3~0.8m と差があるが、深さは 0.5m 前後である。柱痕は検出されなかった。



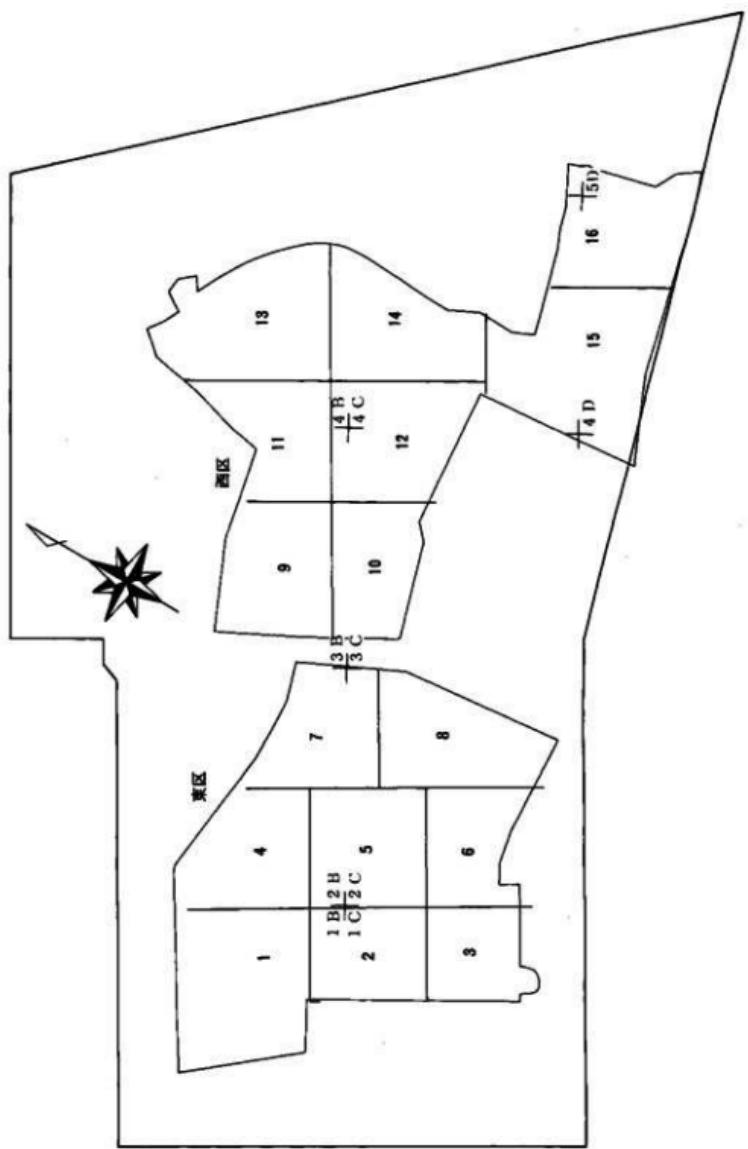
第13図 S B 6

S B 7 (第14図)

S B 6 と重複するが、新旧関係は不明である。N - 1.5° - W に主軸をとる 2間 (4.6m) × 2間 (4.0m) の掘立柱建物跡である。掘方は不整な円形を呈し、径は 0.5m 前後だが、深さは 0.4~0.6m とやや差がある。柱痕は検出されなかった。

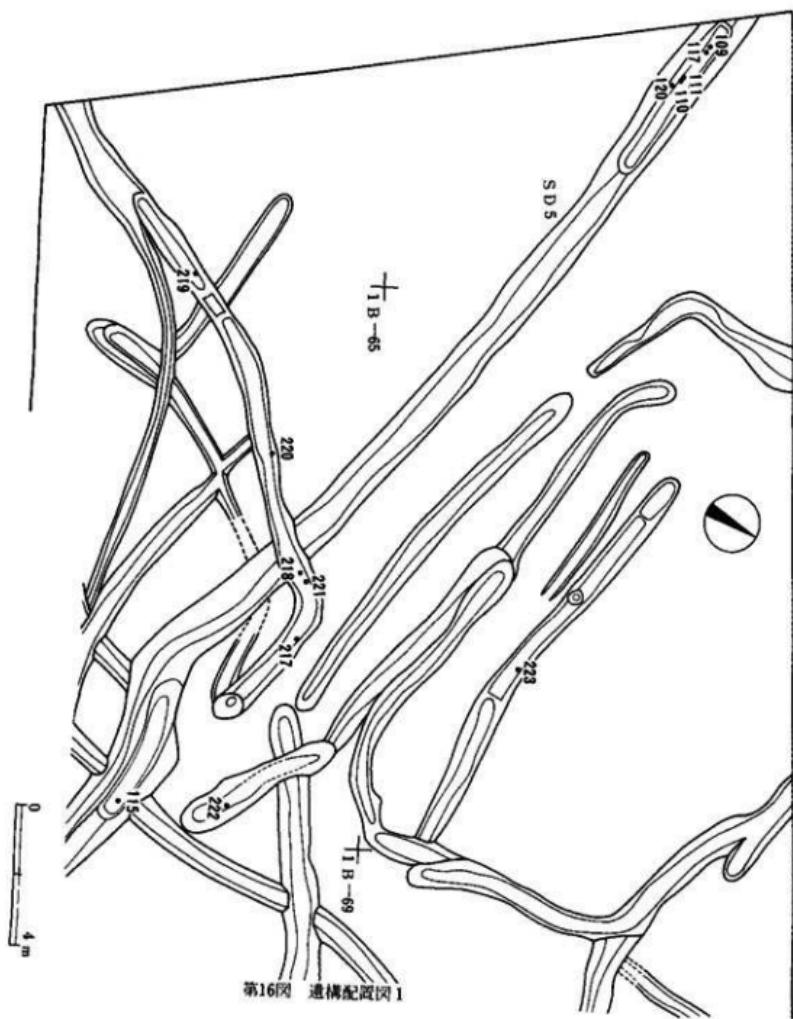


第14圖 SB 7

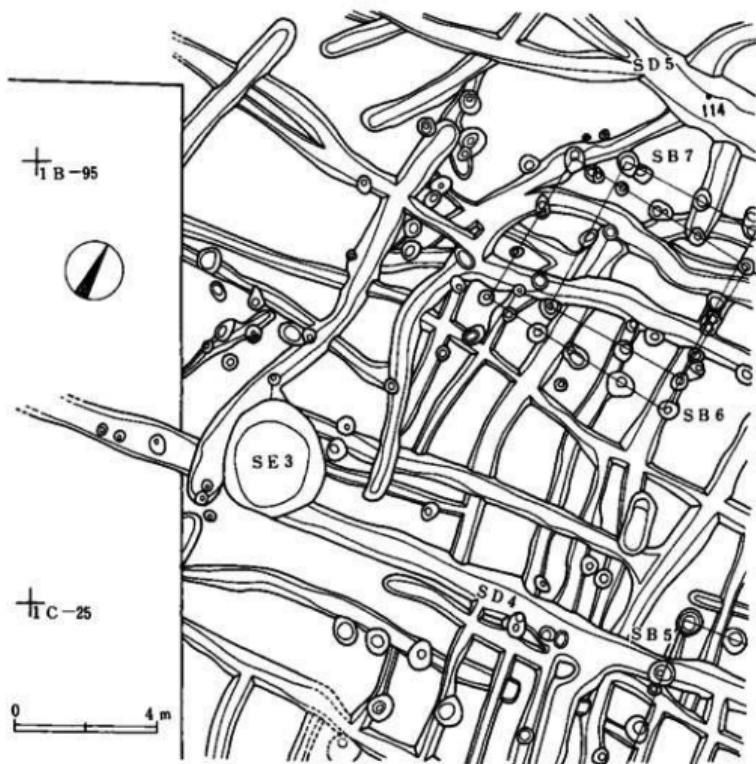


第15図 造構配図区画図 (1/1000)

4. 溝



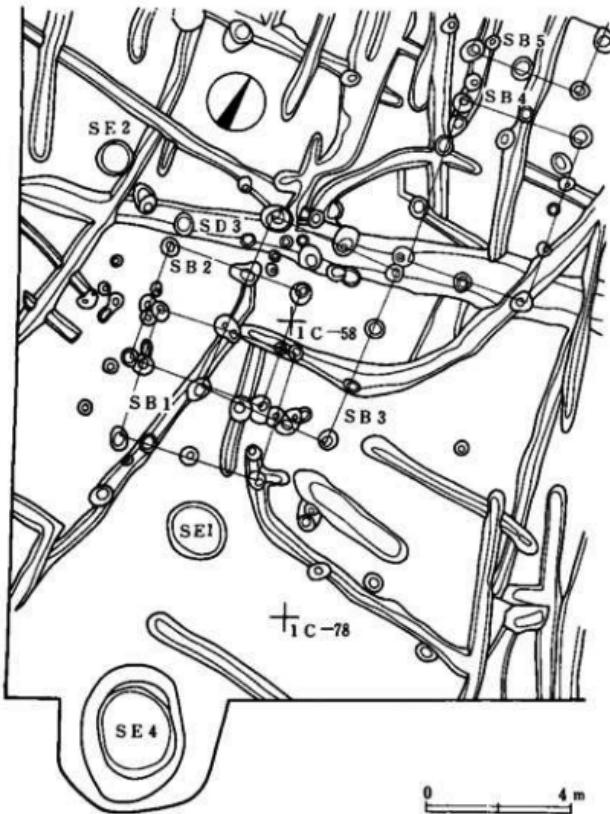
第16図 造構配置図 1



第17図 進構配溝図 2

SD 4 (第17、21図)

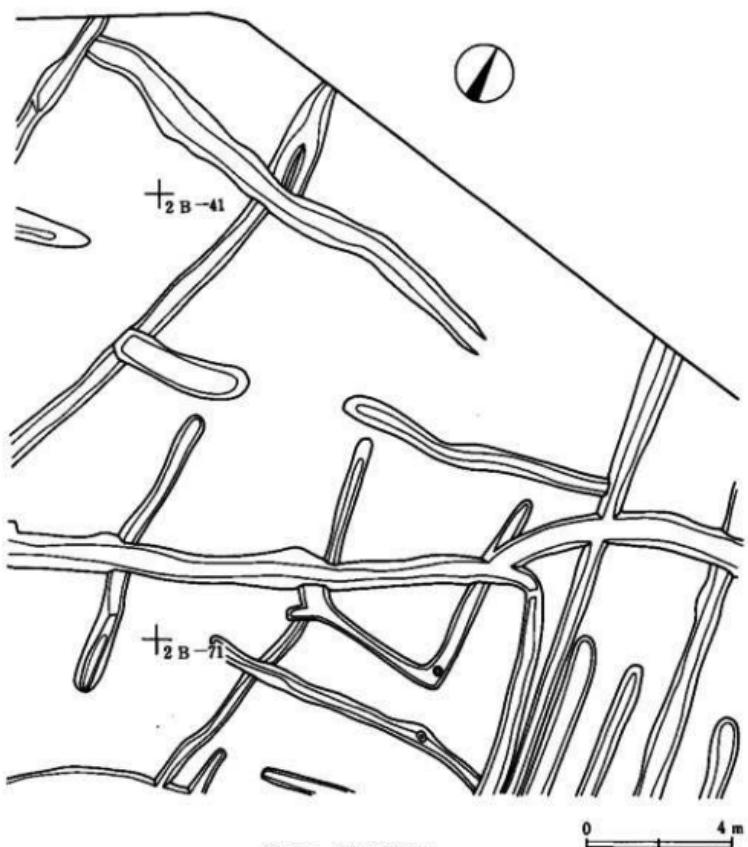
SD 3の北側に位置する東西溝である。西端で擾乱部分に延びている。調査区内の総延長は42mで、幅は0.5~1.2m、深さは0.15~0.25mを測る。溝底はほぼ平坦である。覆土は黒褐色砂層を主体とするものであった。出土遺物は少なく、少量の土器片が出土しただけで、図示できるものはない。



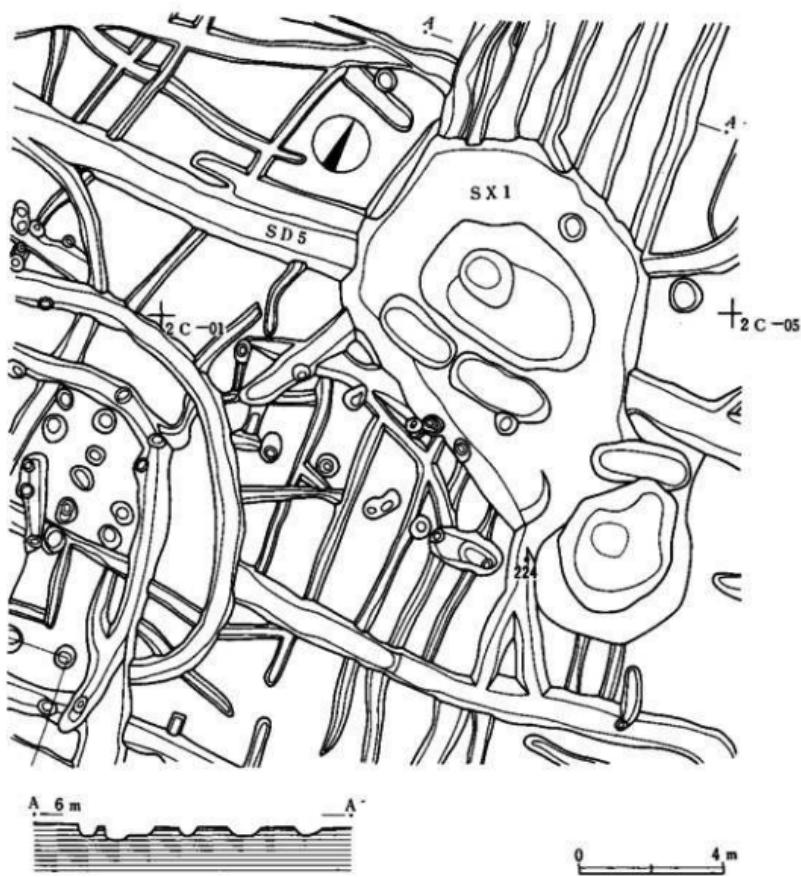
第18図 遺構配図図3

SD 3 (第18、21、23図)

西区の南側に位置する東西溝である。東端でSD 6と重複し、西端で攪乱部分に延びている。調査区内の総延長は43mで、幅は0.8~2mとかなり差があるが、深さも0.15~0.3mを測り、やや差がある。溝底はほぼ平坦である。覆土は黒褐色砂層を主体とするものであった。出土遺物は少なく、少量の土器片が出土しただけで、図示できるものはない。



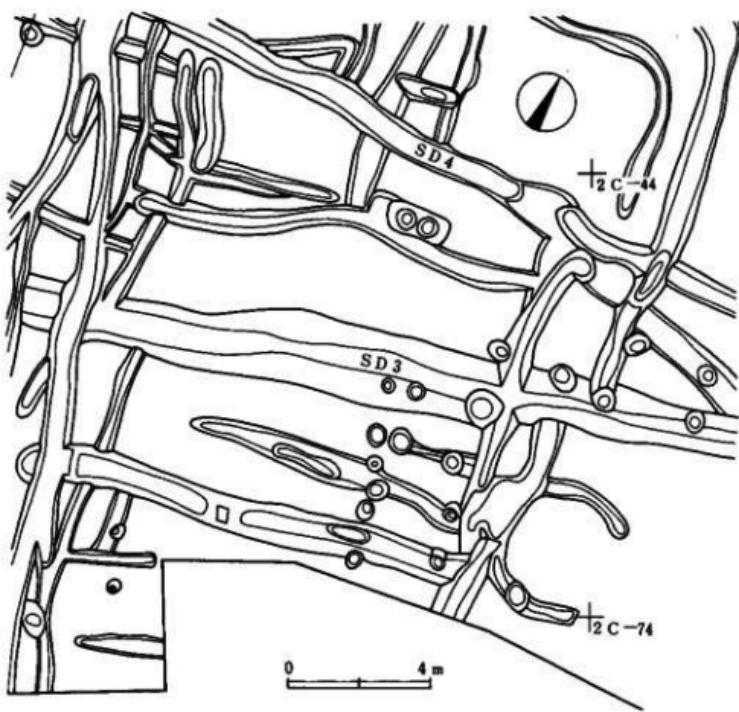
第19図 造構配図4



第20図 遺構配図図 5

SD 5 (第16、17、20、22・23図)

SD 4 の北側に位置する東西溝である。東端で SD 6 と重複し、西端で攪乱部分に延びている。調査区内の総延長は70mで、幅は0.9~1.5m、深さは0.2~0.4mを測る。溝底はほぼ平坦である。覆土は黒褐色砂層を主体とするものであった。出土遺物は比較的多く、部分的に集中して出土する。17点の土器が図示できた。

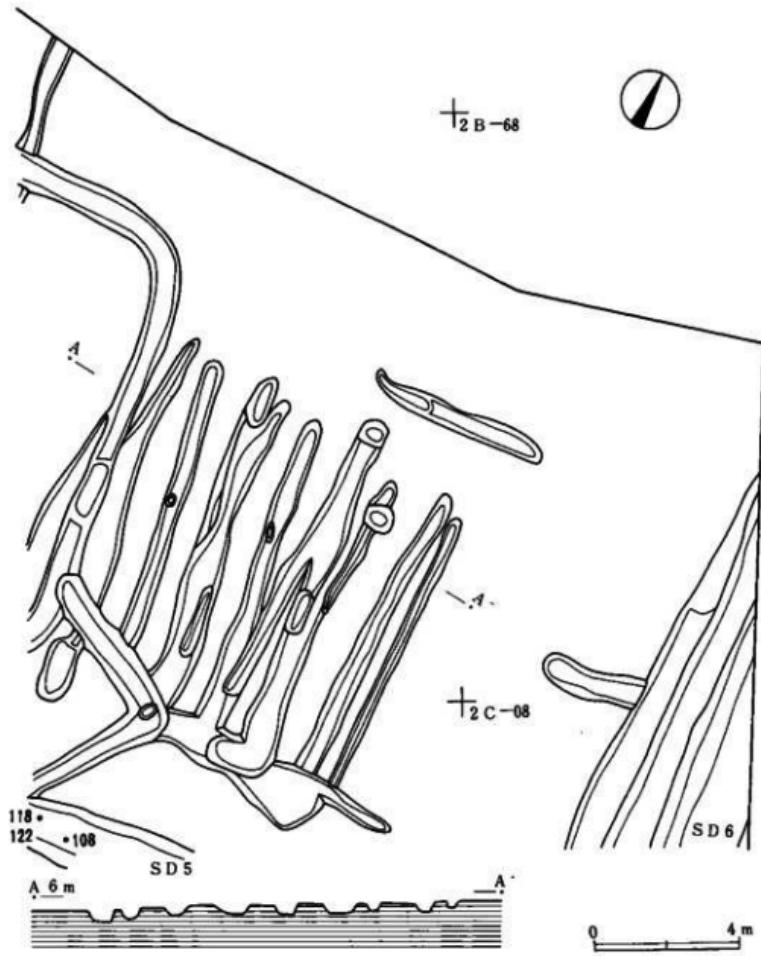


第21図 遺構配図6

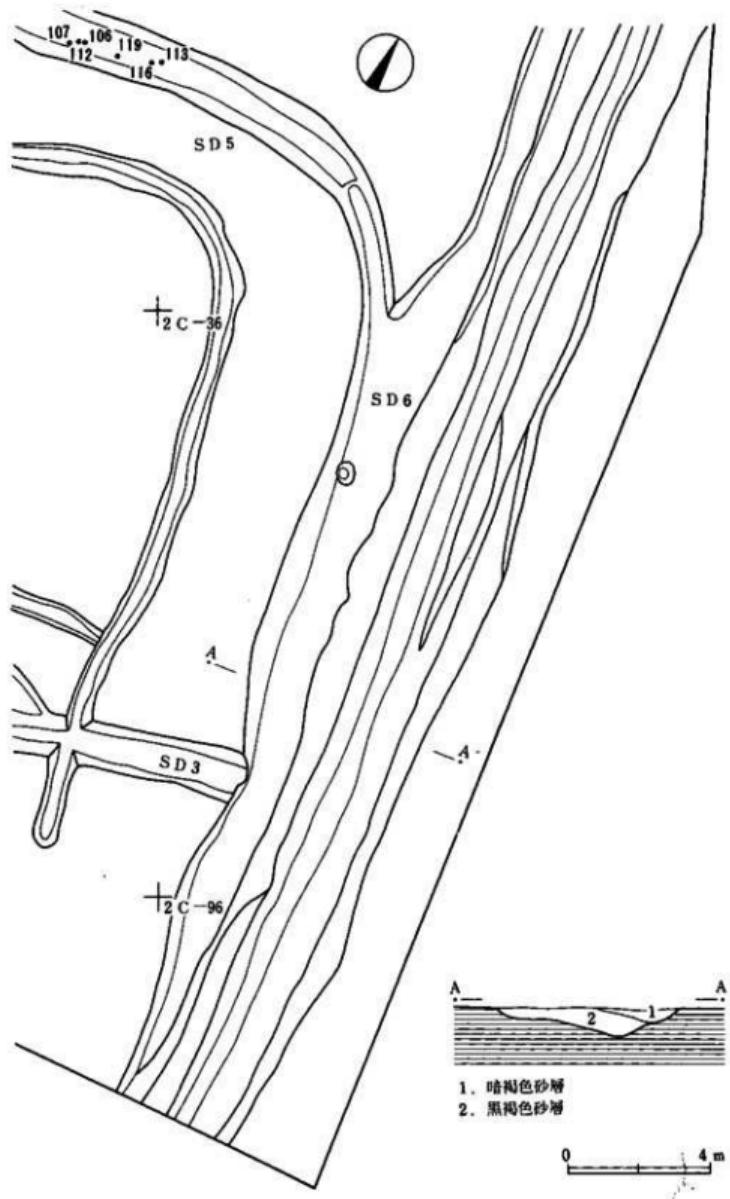
歓状小溝（第20、22図）

今回の調査で数多くの検出された溝のうち、幅が0.5m前後、深さが0.2m前後の小さな溝が1m前後の間隔で平行に並んで群をなす遺構を歓状小溝として報告する。こうした遺構は近年各地で検出されており、畠の歓の痕跡と考えられている。

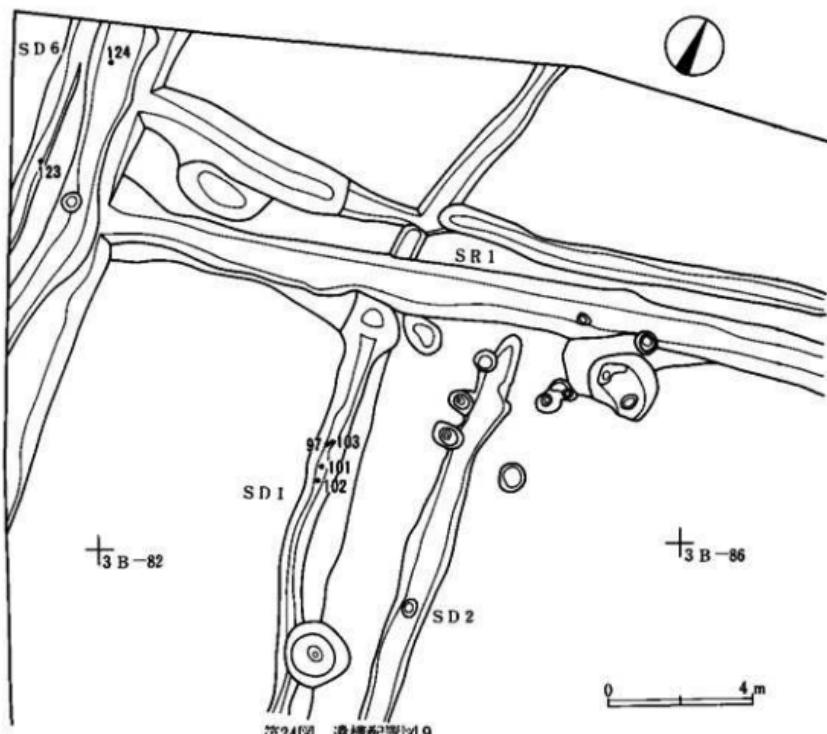
SX1の北側に位置する。幅0.5mの溝が約0.8m間隔で13条ほど平行しており、長さ8~9mで、北端はほぼそろっている。方向はほぼ南北である。溝底はやや凹凸に富む。覆土は黒褐色砂層を主体とするもので、周辺の溝と差がない。覆土中から少量の土器片が出土しているのみで図示できるものはない。



第22图 造構配測図7



第23図 遺構配図8

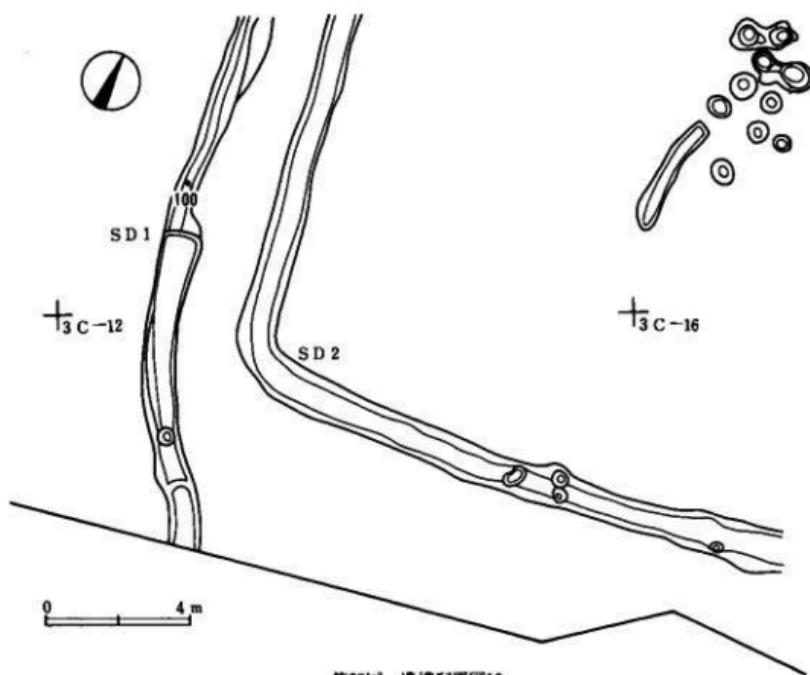


SD 6 (第22・23・24図)

今回の調査区の中央に位置する南北溝である。南端・北端ともに削平部分に延びているものと思われる。調査区内の総延長は60mで、幅は3~6m、深さは0.6~0.8mを測る。溝底はほぼ平坦である。覆土は2層に分けられた。出土遺物は極めて少なく、土器の細片が大半で、北端で出土した2点が図示できただけである。124は一個体分がまとまって出土したものである。

SR 1 (第24、26、29図)

東区の北側に位置する東西溝である。西端はSD 6と重複して終っているが、東端は削平部分へ延びているので全長は不明である。調査区内の総延長は60mで、幅は2~5m、深さは0.3mを測る。本跡は2~3条の溝が複合した遺構で、覆土上層に固く踏みしめられた層が認められることから、道路状遺構と考えられる。出土遺物は極めて少なく、2点の土器が図示できただけである。



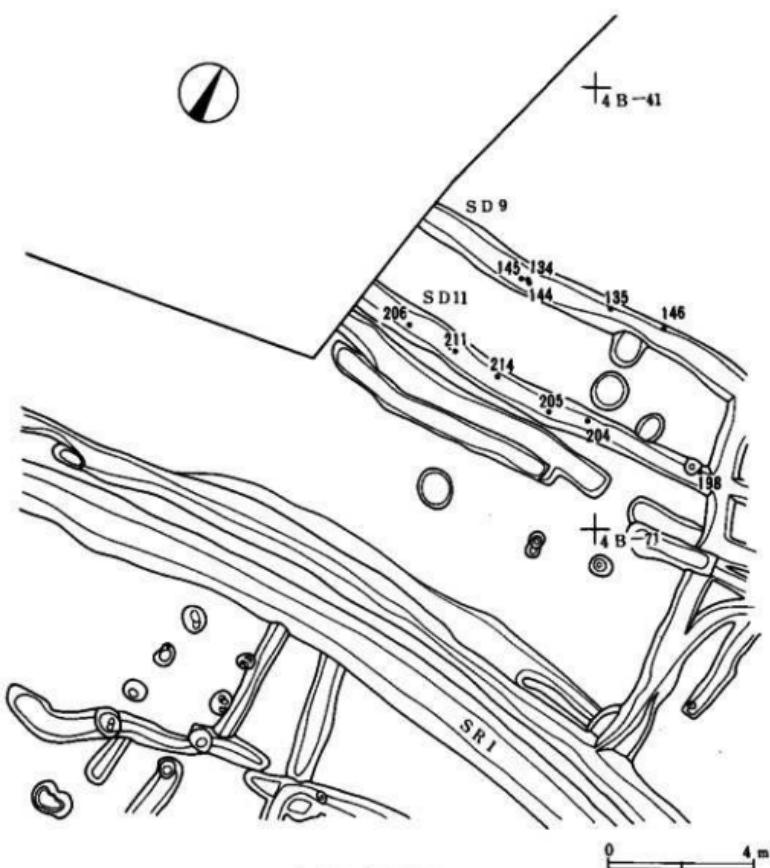
第25図 造構配図10

SD 1 (第24・25図)

東区西側に位置する南北溝である。北端、南端ともに削平部分に延びているものと思われる。調査区内の総延長は30mで、幅は0.7~0.9m、深さはかなり差があり、浅いところで0.2m、深いところで0.5mを測る。溝底は凹凸に富む。覆土は黒褐色砂層を主体とするものであった。出土遺物は全体に少ないが、部分的に集中して出土する。図示できたのは土器だけで、甕の量が多い。

SD 2 (第24・25図、第27図)

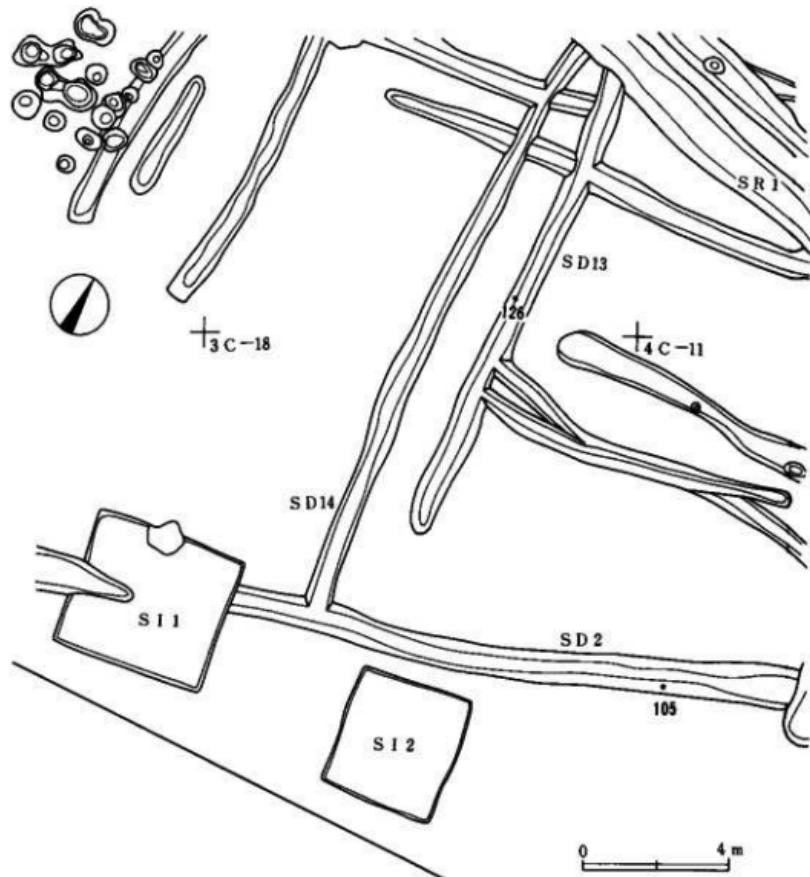
SD 1の東側に位置する。全体の1/3はSD 1と平行しているが、途中で東に曲がる。調査区内の総延長は55mで、幅は0.8~1.3m、深さは0.3mを測る。溝底はやや凹凸に富む。覆土は黒褐色砂層を主体とするものであった。出土遺物は少なく、2点の土器が図示できただけである。



第26図 造構配図図11

SD 9 (第26、28・29図)

SD 8 の南側に位置する東西溝である。東端・西端ともに削平部分に延びている。SD 8・10と重複している。調査区内の総延長は37mで、幅は0.8m～1.3m、深さは0.2～0.4mを測る。溝底はほぼ平坦である。覆土は黒褐色砂層を主体とするものであった。出土遺物は多く、部分的に集中して出土する。23点の土器が図示できた。



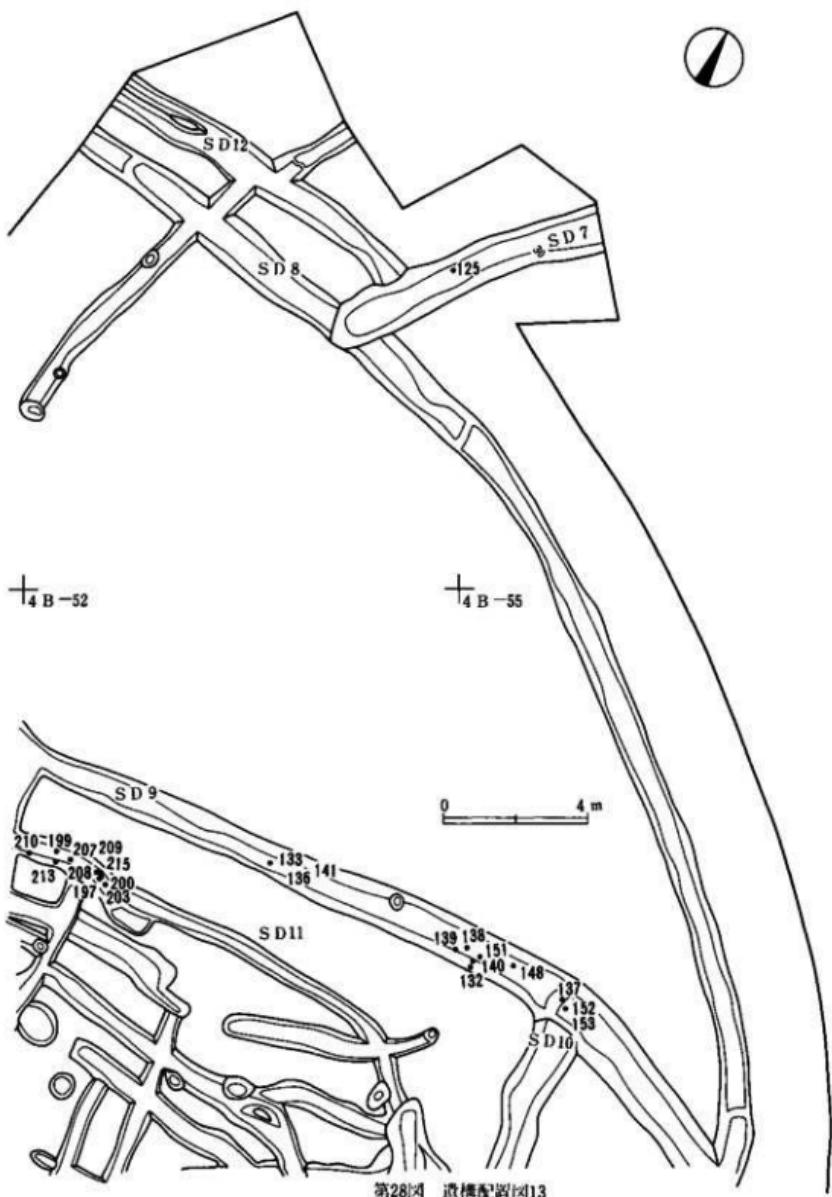
第27図 造構配図12

SD 13 (第27図)

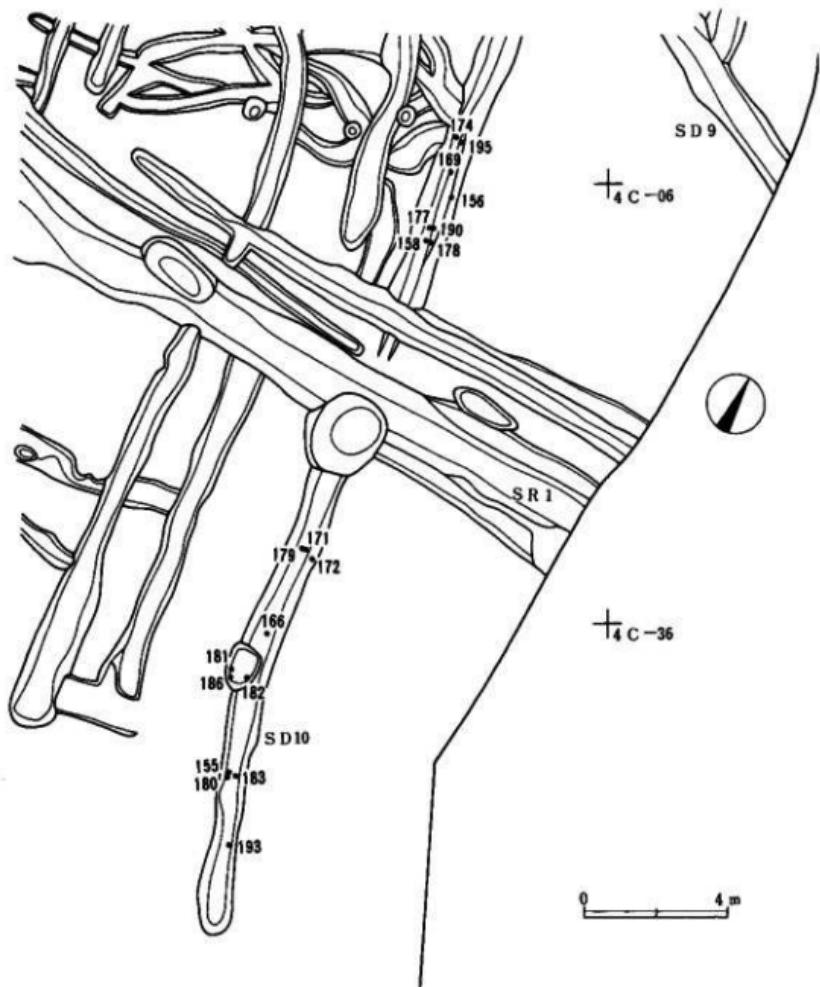
SD 2 の北側で位置する南北溝である。調査区内の総延長は13mで、幅は0.8m、深さは0.2~0.5mを測る。溝底はやや凹凸に富む。覆土は黒褐色砂層を主体とするものであった。出土遺物は少なく、土器が1点図示できただけである。

SD 14 (第27図)

SD 13の西側で平行する南北溝である。南側でSD 2と重複する。調査区内の総延長は17mで、幅は0.5~0.9m、深さは0.2~0.5mを測る。溝底はやや凹凸に富む。覆土は黒褐色砂層を主体とするものであった。出土遺物は少なく、図示できるものはない。



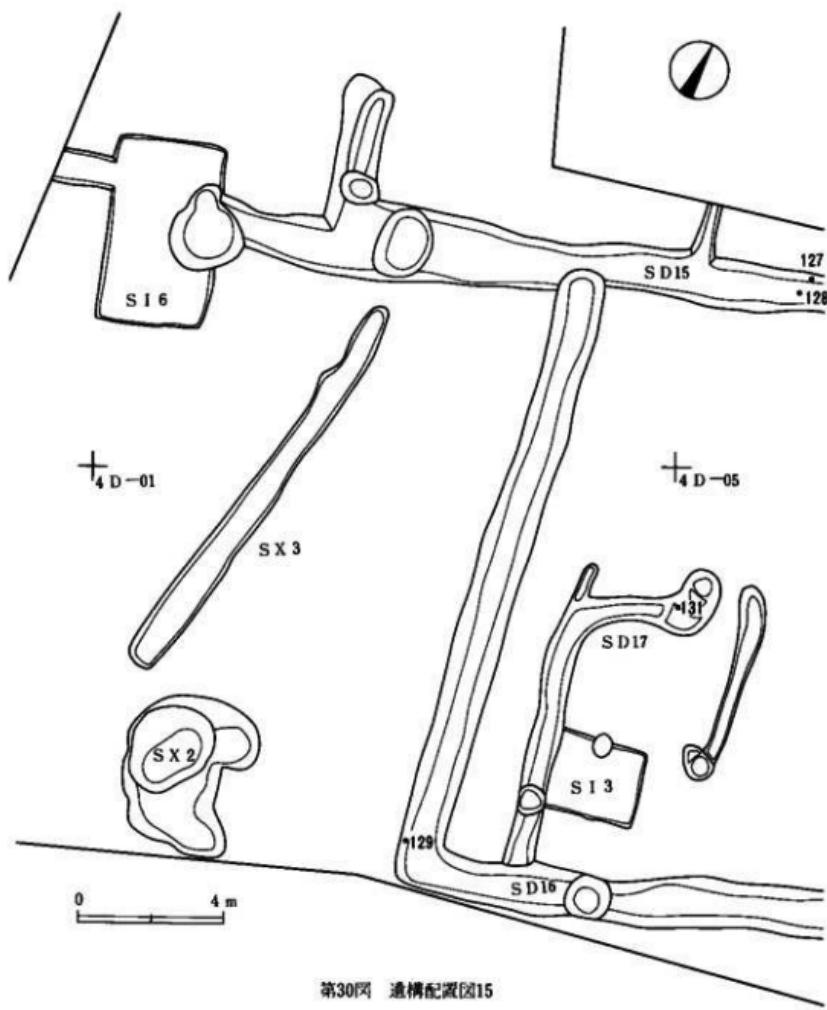
第28図 遺構配図図13



第29図 造構配図|X14

SD 10 (第28・29図)

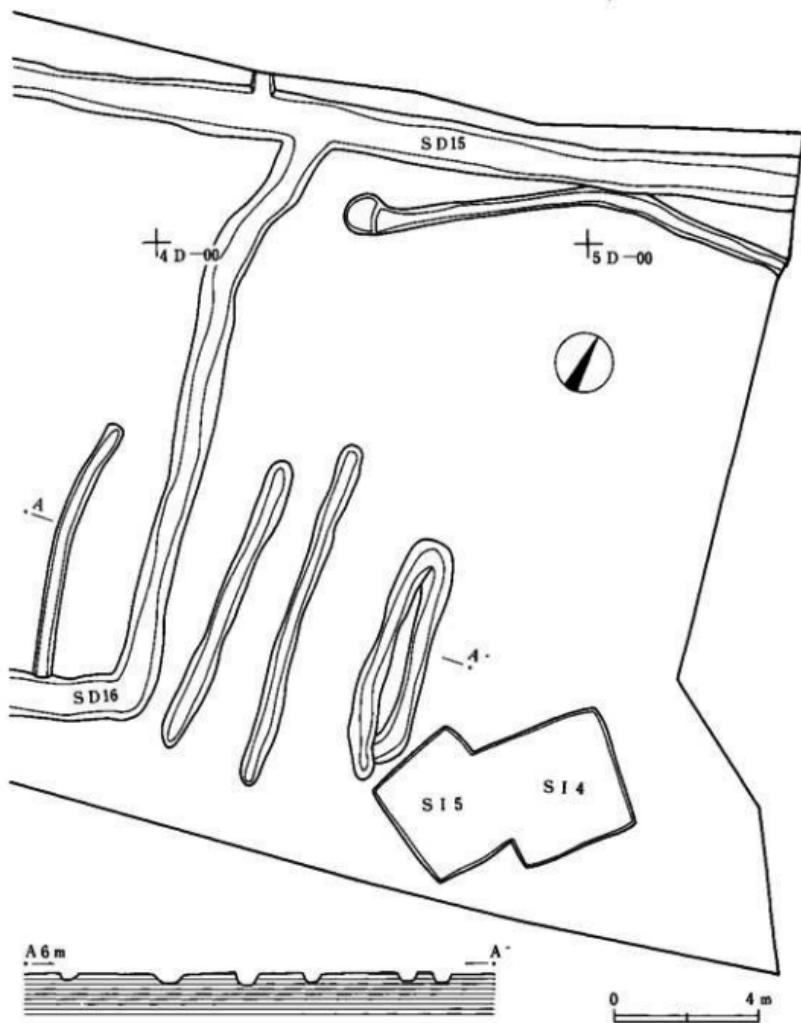
SD 9の東側で重複する南北溝である。調査区内の総延長は30mで、幅は0.6~1.2m、深さは0.2~0.5mを測る。溝底はほぼ平坦である。覆土は黒褐色砂層を主体とするものであった。出土遺物は極めて多く、部分的に集中して出土する。42点の土器が図示できた。その他覆土中から土製筋車が1点出土している。



第30図 造構配図15

SD15 (第30・31図)

東区の南側に位置する東西溝である。東端・西端ともに削平部分に延びており、全長は不明である。調査区内の総延長は43mで、幅は1~1.8m、深さは0.15~0.3mを測る。溝底はほぼ平坦である。覆土は黒褐色砂層を主体とするものであった。出土遺物は少なく、土器が2点図示できただけである。



第31図 遺構配図16

SD16 (第30・31図)

SD15と2ヶ所で重複する周溝状の溝である。調査区内の総延長は48mで、幅は0.9~1.4m、深さは0.3~0.5m測る。溝底はほぼ平坦である。覆土は黒褐色砂層を主体とするものであった。出土遺物は少なく、土器が2点図示できただけである。

SD 7 (第28図)

東区の北端に位置する。SD 8・12と重複し、東端で削平部分に延びているものと思われる。調査区内の総延長は8mで、幅は1~1.4m、深さは0.3~0.4mを測る。溝底はほぼ平坦である。覆土は黒褐色砂層を主体とするものであった。出土遺物は少なく、土器が1点図示できただけである。

SD 8 (第28図)

SD 7の南側に位置する。全体の1/2は東西方向に延びるが、残り1/2は緩やかに南に曲がり、SD 9と重複する。調査区内の総延長は32mで、幅は0.7~1.2m、深さは0.3mを測る。溝底はほぼ平坦である。覆土は黒褐色砂層を主体とするものであった。出土遺物は極めて少なく、図示できるものはない。

SD 11 (第26、28図)

SD 9の南側に位置する。全体の4/5は東西方向に延びるが、残り1/5は南に曲がる。調査区内の総延長は30mで、幅は0.4~0.9mで、深さは0.2~0.4mを測る。溝底はほぼ平坦である。覆土は黒褐色砂層を主体とするものであった。出土遺物は多く、部分的に集中して出土する。21点の土器が図示できた。

SD 12 (第28図)

東区の北端に位置する東西溝で、東側でSD 7と重複する。西端は削平部分に延びている。調査区内の総延長は10mで、幅は0.7~1m、深さは0.2m前後を測る。溝底はほぼ平坦である。覆土は黒褐色砂層を主体とするものであった。出土遺物はない。

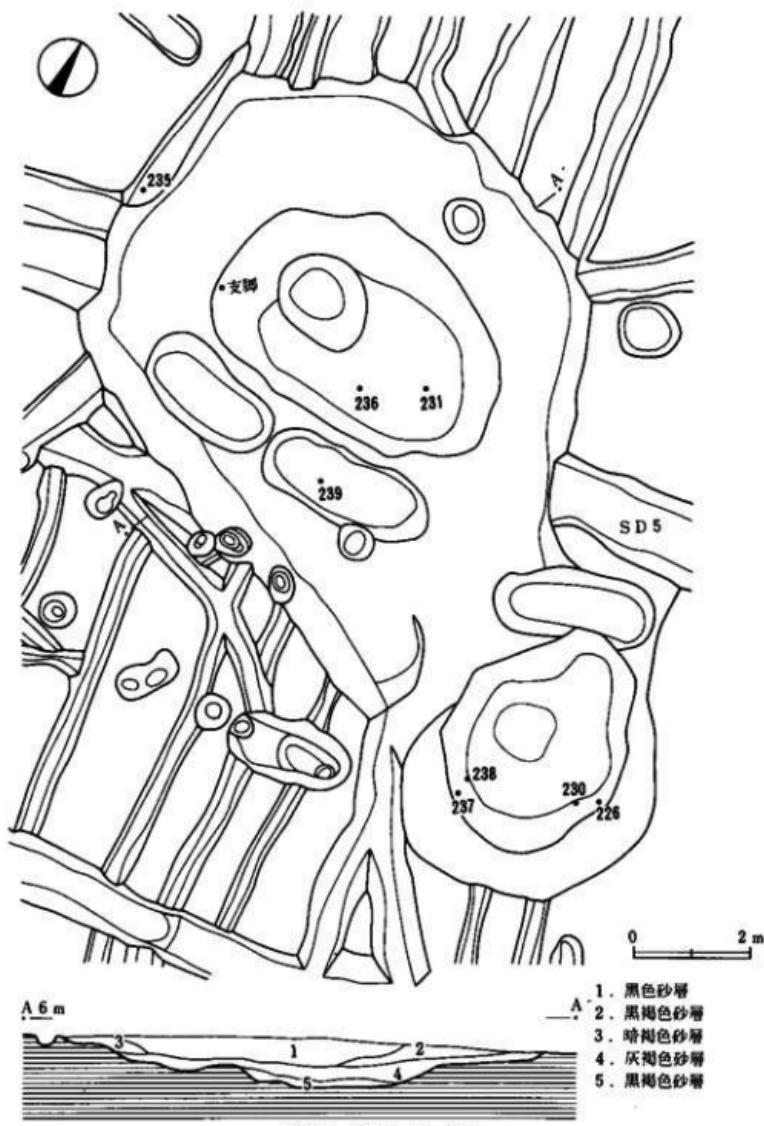
SD 17 (第30図)

SD 15の南側に位置する。全体の3/5は南北方向に延びるが、残り2/5は東に曲がる。調査区内の総延長は11mで、幅は0.7~1.1m、深さは0.25~0.5mを測る。溝底はほぼ平坦である。覆土は黒褐色砂層を主体とするものであった。出土遺物は少なく、土器が1点図示できただけである。

5. その他の遺構

S X 1 (第32図)

西区のほぼ中央に位置する。北側で畝状小溝と重複し、中央部でSD 5と重複している。プランは、11×8mの橢円形に5×4mの橢円形が接続するような形態を呈する。北側は、0.3mほどの深さでやや急な傾斜で掘り込まれ、途中は幅1.5mほどのテラスとなり、さらに中央部が緩やかな傾斜で掘り下げられている。テラス面には深さ0.1mほどの橢円形の掘込みと、深さ0.3mほどのピットが、それぞれ2ヶ所ずつ検出された。中央部の底面までの深さは0.8mを測る。南側はやや急な傾斜で底面まで掘り込まれている。深さは1mを測る。覆土は5層に分けられた。本跡は、調査中にやや湧水がみられたものの、湧水点を掘りあてたも



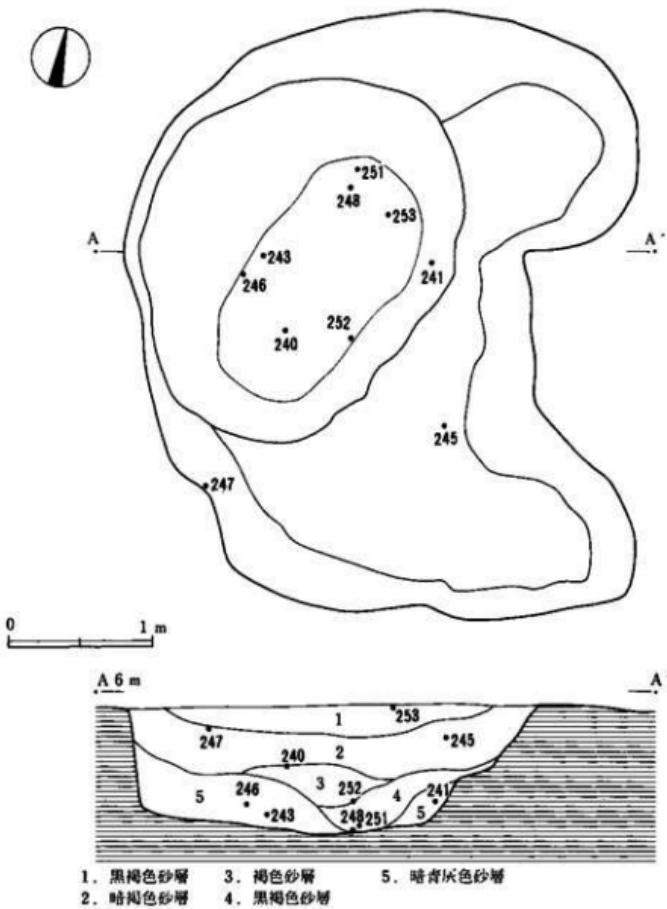
第32図 SX 1 (1/100)

- 1. 黒色砂層
- 2. 黒褐色砂層
- 3. 暗褐色砂層
- 4. 灰褐色砂層
- 5. 黑褐色砂層

のではなく、井戸と言うよりは、水溜状の遺構と思われる。出土遺物は比較的多く、15点の土器を図示することができた。他に土製支脚が1点出土している。

S X 2 (第33図)

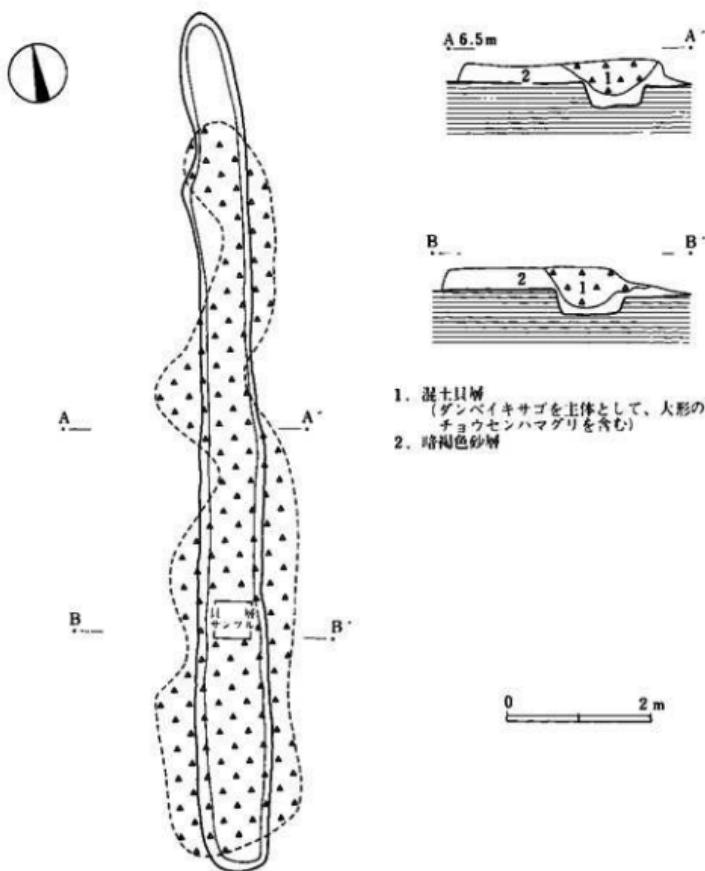
東区の南端に位置する土坑である。プランはC字形を呈し、中央部が一段深く掘り込まれている。深さは0.9mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は5層に分けられた。出土遺物は比較的多く、14点の土器が図示できた。



第33図 S X 2 (1 / 40)

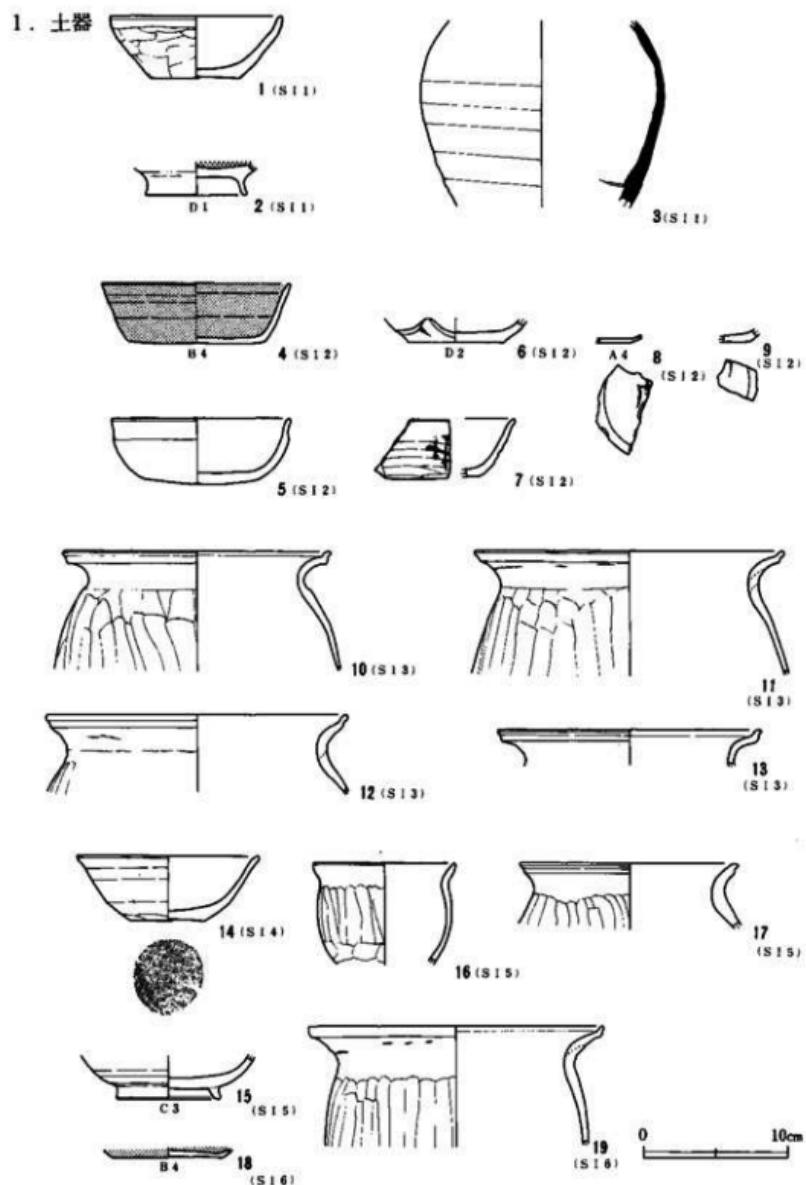
S X 3 (第34図)

S X 2 の北側に位置する土坑である。プランは、長さ11.7m、幅0.7~1mの溝状を呈する。深さは0.6mを測る。底面はほぼ平坦である。底に一層暗褐色砂層が堆積し、その上に厚さ0.5mほどの貝（ダンベイキサゴ、チョウセンハマグリ他）の堆積層がある。貝層の良好な部分で柱状サンプルを採取した。出土遺物は極めて多く、貝層中から多量の土器が出土しており、37点の土器を図示することができた。



N. 遺物

1. 土器



第35図 S11～6出土土器

S I 1 (第35図)

1は壺で1/4が遺存する。体部及び底部全面は手持ちヘラケズリされる。2は高台付の壺の高台部で1/2が遺存する。内黒土器である。3は長頸壺の胴部で2/3が遺存する。肩部に薄い自然釉がのる。淡黄灰色を呈する。

S I 2 (第32図)

4は壺で1/3が遺存する。5も壺で1/4が遺存する。6は壺の底部破片で、体部外面に墨書が認められる。7は壺の破片で、外面に墨書の文字が認められるが、判読不可能である。8は壺の底部破片で、墨書の文字が認められるが、やはり判読不可能である。9も壺の底部破片で、墨書が認められる。

S I 3 (第35図)

10は甕の口縁部で1/4が遺存する。11も甕の口縁部で1/4が遺存する。外面に薄くスヌが付着する。12は甕の口縁部で1/6が遺存する。13も甕の口縁部で1/2が遺存する。

S I 4 (第35図)

14は壺で1/3が遺存する。

S I 5 (第35図)

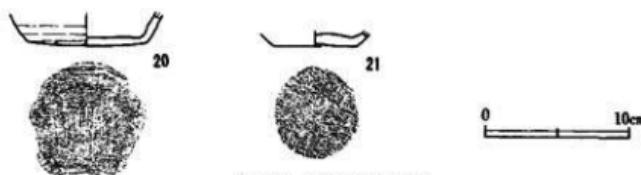
15は高台付の壺で1/3が遺存する。16は小形甕で1/2が遺存する。17は甕の口縁部で1/4が遺存する。

S I 6 (第35図)

18は壺の底部の1/2破片である。19は甕の口縁部で1/4が遺存する。

S E 1 (第36図)

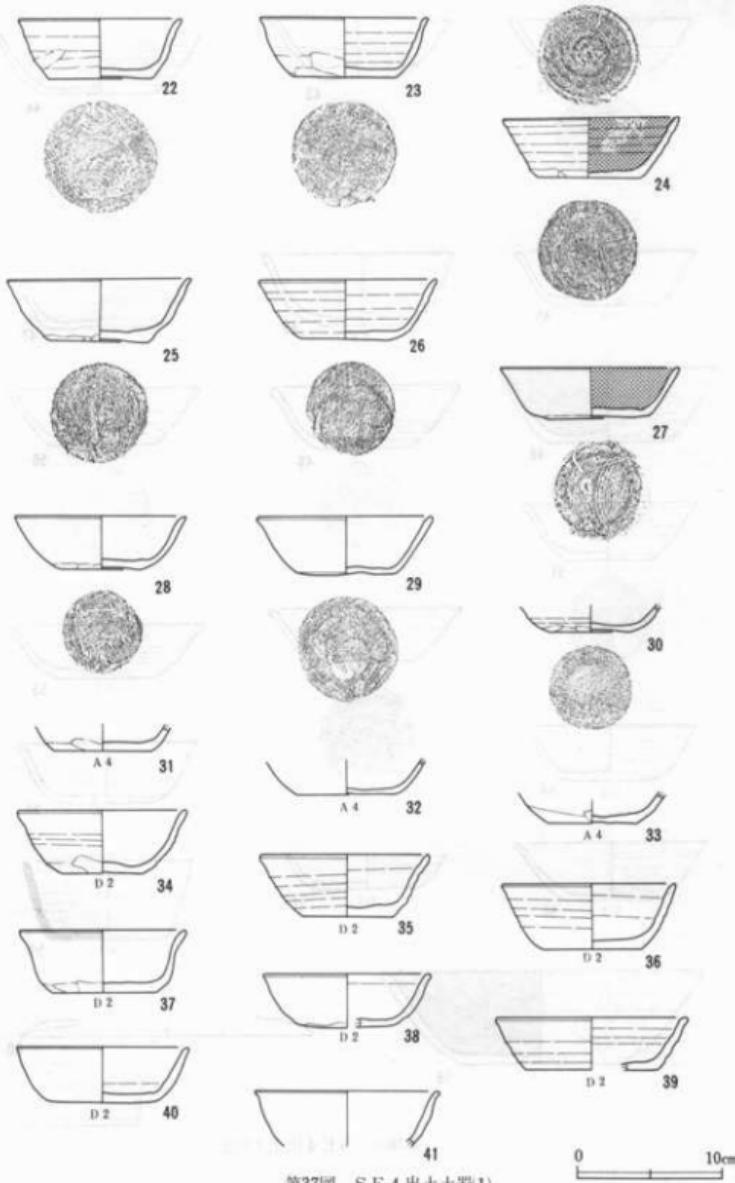
20は壺の底部破片である。21も壺の底部破片である。



第36図 S E 1 出土土器

S E 4 (第37~40図)

22は壺で1/3が遺存する。底部内面はやや剥落している。23は壺で2/5が遺存する。24は壺でほぼ完形である。内黒土器で、一部に油煙が付着する。また底部内面には「山」の線刻が認め

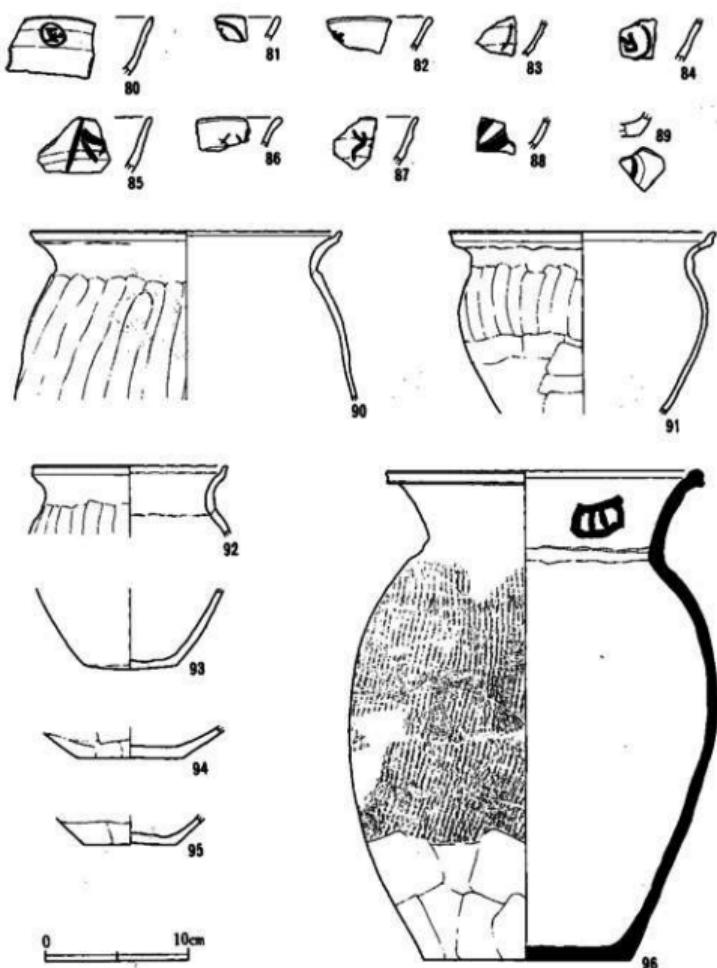


第37図 S E 4 出土土器(1)



第38図 S E 4 出土土器(2)





第40図 S E 4 出土土器(4)

られる。25は壺で3/5が遺存する。26は壺で4/5が遺存する。27は壺で1/2が遺存する。内黒土器。28は壺で4/5が遺存する。29は壺で4/5が遺存する。30～33は壺の底部破片である。34は壺で完形である。35は壺で4/5が遺存する。36は壺で完形である。外面の遺存状態は悪い。37は壺で2/3が遺存する。38は壺で1/2が遺存する。39は壺で2/5が遺存する。40は壺で2/5が遺存する。41は壺の1/5破片である。42は壺で2/3が遺存する。43は壺で2/3が遺存する。44は壺で4/5

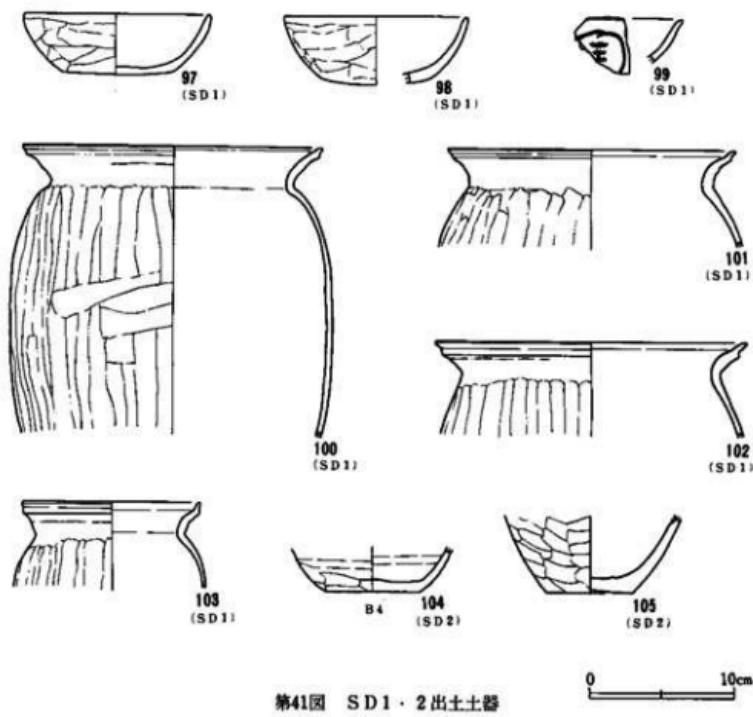
が遺存する。45は壺で1/2が遺存する。46は壺で2/3が遺存する。47は壺で3/4が遺存する。48は壺で2/3が遺存する。内黒土器で、ヘラミガキされる。49は壺ではほぼ完形である。50は壺で完形である。51は壺で1/2が遺存する。52は壺ではほぼ完形である。53は壺で1/2が遺存する。54は壺で2/5が遺存する。55は壺で2/5が遺存する。56は壺で2/5が遺存する。57は壺で3/4が遺存する。58は大形の壺で2/5が遺存する。内黒土器で、ヘラミガキされる。59は須恵器の壺で1/2が遺存する。胎土は精選されており、焼成も堅敏である。淡青灰色を呈する。60は蓋の破片である。61は壺で1/2が遺存する。底部外面には「郡厨」の墨書文字が認められる。62は壺で2/3が遺存する。体部に「万福」の墨書文字が認められる。63は壺で1/2が遺存する。体部に墨書が認められるが、判読不可能である。64は壺で2/3が遺存する。体部に「+」の墨書が認められる。65は壺の底部破片で、外面に「□厨」の墨書文字が認められる。66は壺で2/3が遺存する。体部に墨書が認められるが、判読不可能である。67は壺で3/4が遺存する。内面に「海」の墨書文字が認められる。68は壺で3/4が遺存する。体部に墨書文字が認められる。「當」か「留」と思われる。69は壺の底部破片で外面に墨書文字が認められる。やや不鮮明であるが、「子備」と思われる。70は壺で2/3が遺存する。底部外面に「+」の墨書が認められる。71は壺で2/3が遺存する。体部に「+」?の墨書が認められる。72は壺で3/4が遺存する。外面に「○」の墨書が認められる。73は壺で4/5が遺存する。体部に「圓」の墨書が認められる。74は壺で4/5が遺存する。体部に「万立」の墨書文字が認められる。75は壺で1/5が遺存する。体部に「⑦」の墨書が認められる。76は壺で1/4が遺存する。体部に墨書が認められるが、判読不可能である。内黒土器。77は壺の底部で、内面に墨書文字「□立」が認められる。78は壺で1/4が遺存する。体部に墨書文字「万加」が認められる。79は蓋の破片で、外面に「庵（序）」の墨書文字が認められる。80は壺の破片で、外面に「①」の墨書が認められる。81~89は壺の破片で、いずれも墨書が認められる。85は「万」、87は「□入」と思われる。90は甕で1/2が遺存するが、全体に遺存状態が悪い。91は甕で2/5が遺存する。外面はススの付着が著しい。92は甕で2/5が遺存する。93~95は甕の底部破片である。96は須恵器の甕で3/4が遺存する。外面にはタタキ目がつけられる。頸部内面には「四」の墨書が逆位で記されている。胎土には石英粒・甕母粒を多く含み、焼成もやや悪い。淡赤褐色を呈する。

SD 1 (第41図)

97は壺で3/4が遺存する。98は壺で1/4が遺存する。99は壺の口縁部破片で、墨書が認められる。100は甕で3/4が遺存する。101は甕で1/4が遺存する。102は甕で1/4が遺存する。103は小形の甕で3/4が遺存する。

SD 2 (第41図)

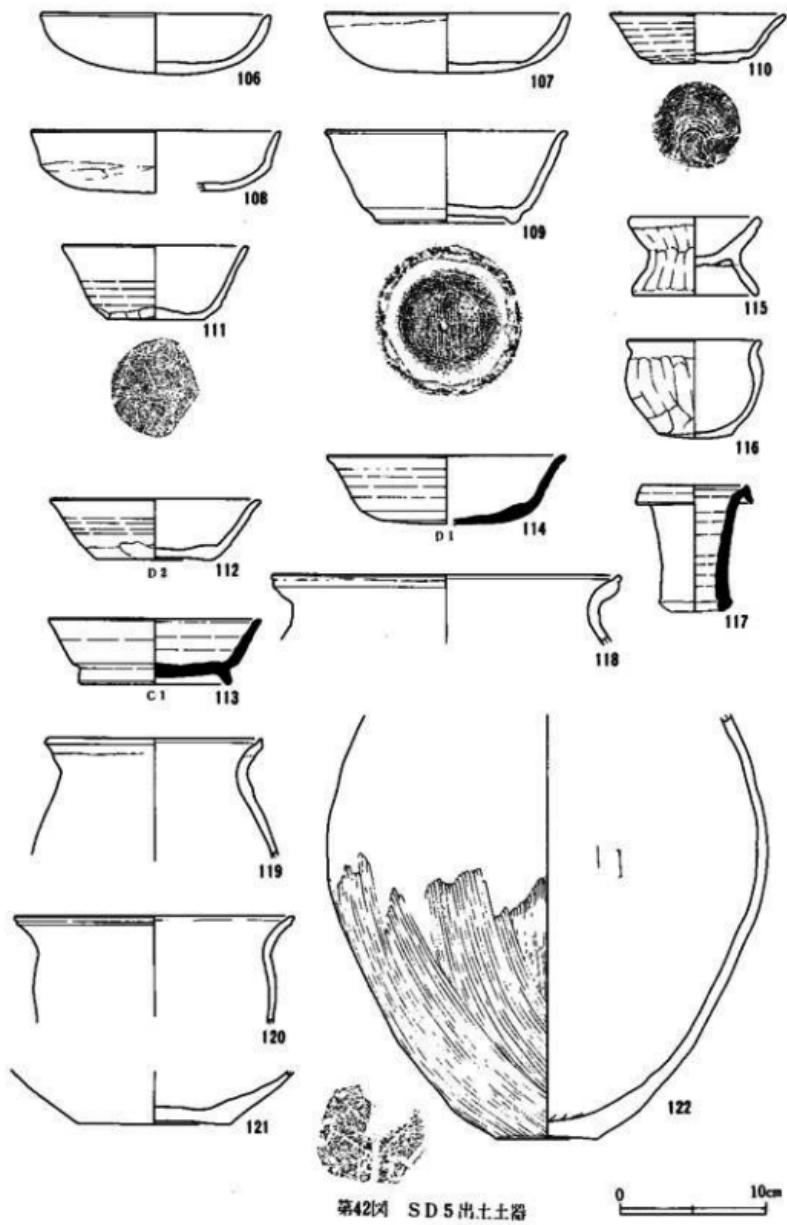
104は壺で3/4が遺存する。105は甕で3/4が遺存する。



第41図 SD 1・2 出土土器

SD 5 (第42図)

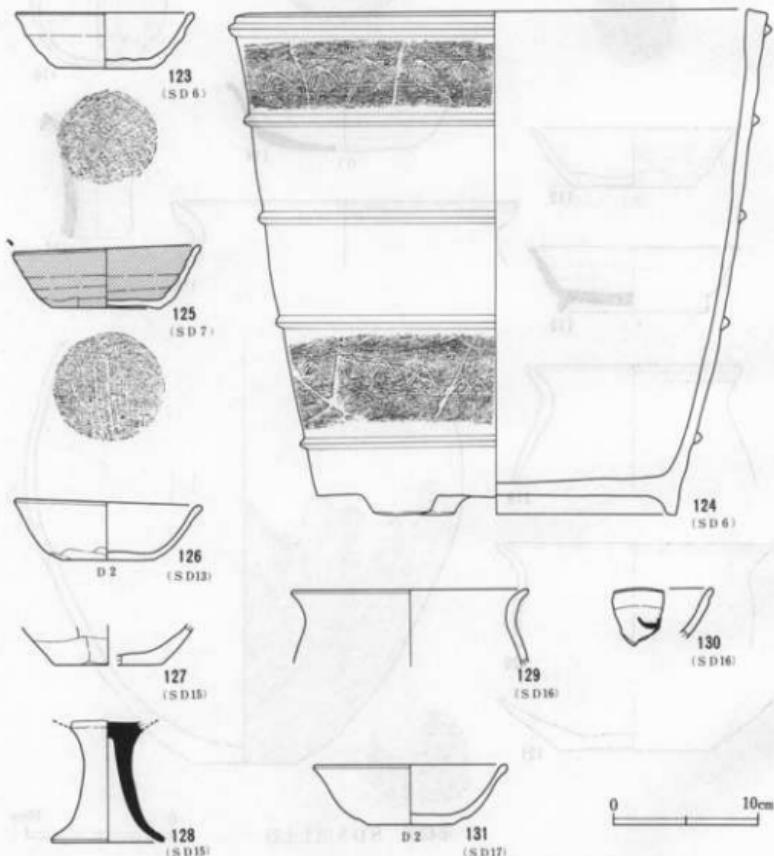
106は杯で完形である。内外面共にヘラミガキされる。107は杯で完形である。内面はヘラミガキされる。108は杯で2/5が遺存する。109は高台付の杯で2/3が遺存する。高台は削り出で、シャープさを欠く。110は杯で3/4が遺存する。111は杯で1/3が遺存する。112は杯で1/2が遺存する。113は須恵器の高台付の杯で1/3が遺存する。高台は貼り付けである。胎土には細砂粒を多く含む。焼成もやや悪い。淡黄灰色を呈する。114は須恵器の杯で1/2が遺存する。胎土には石英粒・雲母粒を多く含むが、焼成は良い。淡灰色を呈する。115は器台?で3/4が遺存する。116は小形の甕で4/5が遺存する。底部もヘラケズリされる。117は須恵器の長頸甕である。体部との接合痕が残る。胎土には細砂粒を多く含むが、焼成は良い。内面と外面の一部に自然釉がのる。淡灰色を呈する。118は甕の口縁部で3/5が遺存する。胎土には石英粒・雲母粒を多量に含む。119は甕で3/4が遺存する。120は甕で2/5が遺存する。121は甕の底部で1/2が遺存する。122は甕で1/2が遺存する。外面には長いヘラミガキが加えられる。底部には木葉痕を残す。胎土に



は石英粒・雲母粒を多く含み、焼成も悪い。

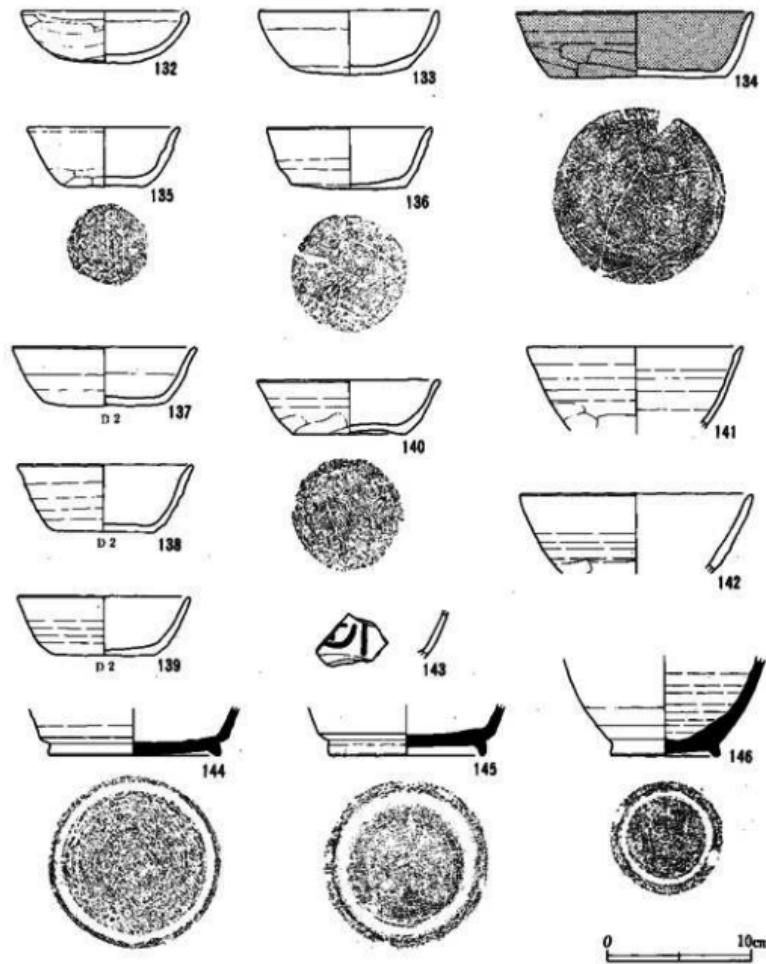
S D 6 · 7 · 13 · 15 · 16 · 17 (第43図)

123は壺で1/4が遺存する。124はいわゆる瓦質の土器で、3/4が遺存する。外面には貼り付けによる突帯が5本めぐる。1本目と2本目の間、4本目と5本目の間にはスタンプによる山形文がめぐる。足は貼り付けによるもので、3個ある。内外面ともにヨコナデされ、外面は部分的に横方向にヘラミガキされる。内外面とも黒色処理され、黒色を呈する。器肉は明赤褐色を呈する。形態からして火舎と考えられる。時期は不明である。中世以降であろうか。125は壺で完形である。126は壺で2/3が遺存する。127は甕の底部の1/2破片である。128は須恵器で高壺?の脚部と思われる。胎土には細砂粒を多く含み、焼成も悪い。淡黄灰色を呈する。129は甕

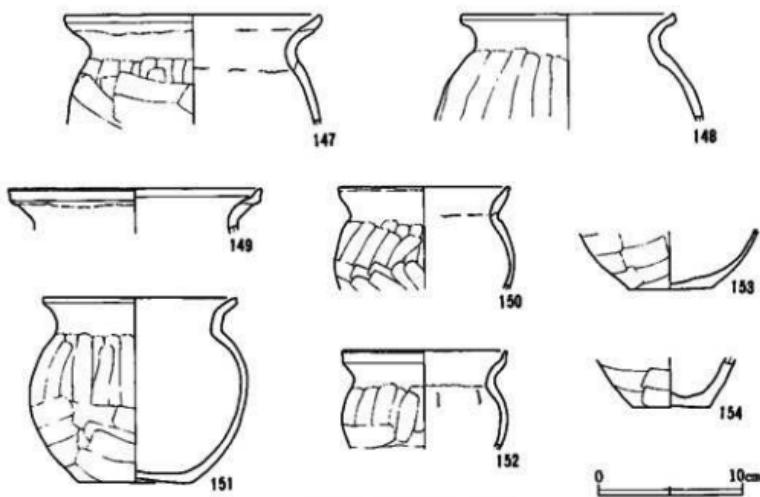


第43図 SD 6 · 7 · 13 · 15 · 16 · 17出土土器

の口縁部で1/4が遺存する。外面は遺存状態が悪い。130は壺の破片で、墨書きが認められる。131は壺で1/2が遺存する。



第44図 SD 9 出土土器(1)



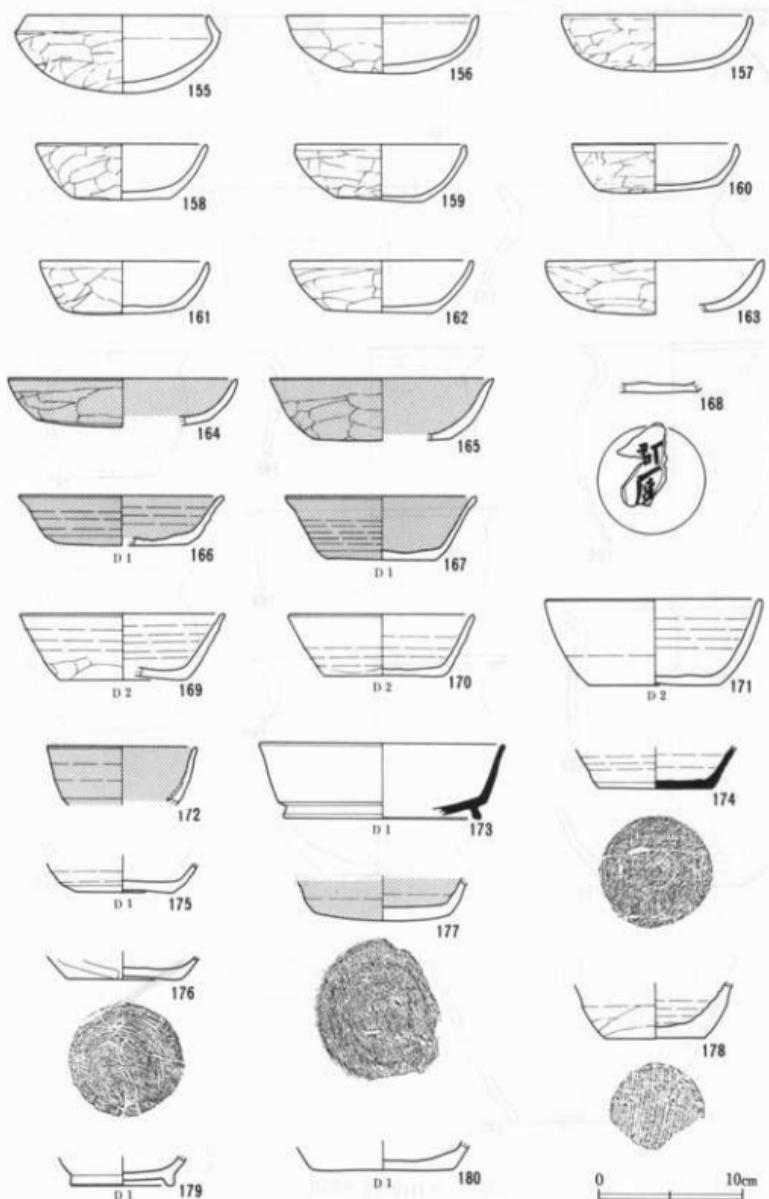
第45図 SD 9出土土器(2)

SD 9 (第44~45図)

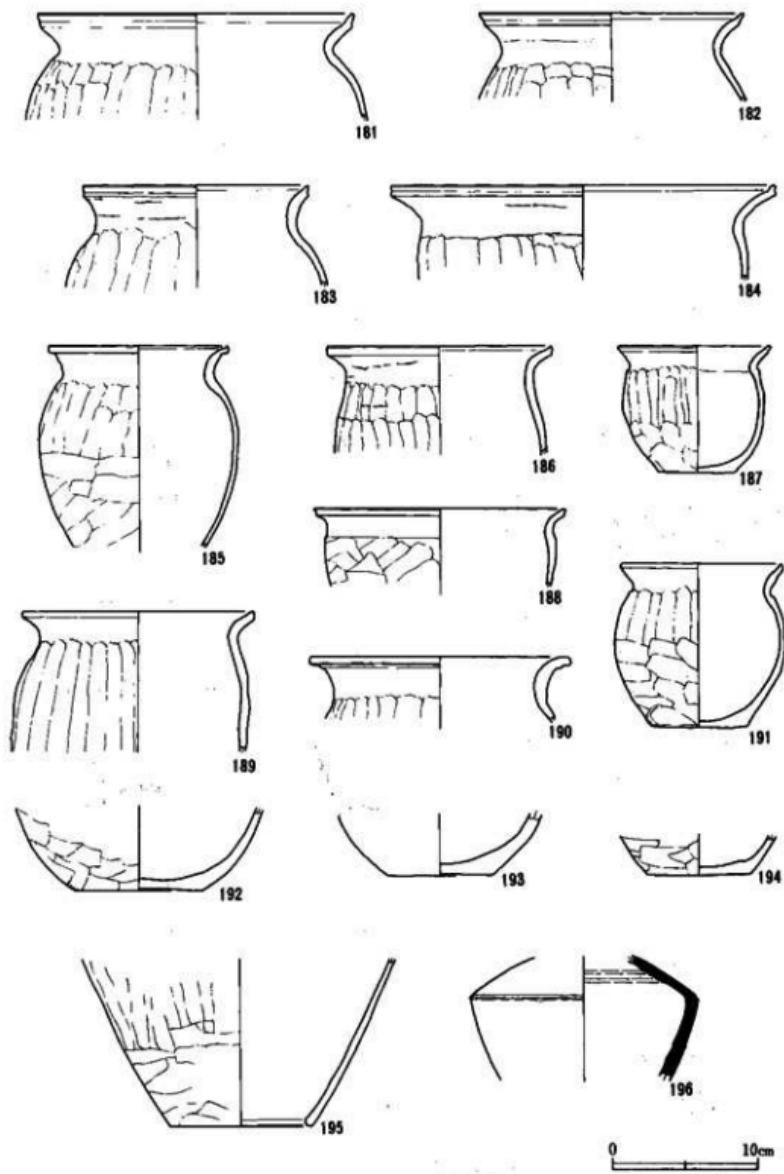
132は杯で完形である。133は杯で3/4が遺存する。134は盤状杯でほぼ完形である。135は杯で3/4が遺存する。136は杯で3/4が遺存する。137は杯で1/3が遺存する。138は杯で完形である。139は杯でほぼ完形である。140は杯で3/4が遺存する。141は杯で1/4が遺存する。142は杯で2/3が遺存する。143は杯の破片で、墨書が認められる。144・145は須恵器の高台付杯で、高台は貼り付けである。いずれも胎土には細砂粒を多く含むが、焼成は良く、淡黄灰色を呈する。146は須恵器の長頸壺で、高台は貼り付けである。胎土には細砂粒をやや含むが緻密で、焼成も良い。淡灰色を呈する。147は甕で3/5が遺存する。148は甕で1/2が遺存する。149は甕の口縁部で1/2が遺存する。150は小形の甕で1/2が遺存する。151は小形の甕で3/4が遺存する。152は小形の甕で1/2が遺存する。153・154は小形の甕の底部である。

SD 10 (第46~47図)

155は杯で2/3が遺存する。内面はヘラミガキされる。156は杯で1/2が遺存する。底部はヘラケズリによって作り出している。内面はヘラミガキされる。157は杯で1/4が遺存する。内面はヘラミガキされる。158は杯で3/5が遺存する。159は杯で1/2が遺存する。160は杯で3/4が遺存する。内面はヘラミガキされる。161は杯で3/5が遺存する。162は杯で3/5が遺存する。163は杯で1/4が遺存する。内面はヘラミガキされる。164は杯で1/4が遺存する。165は杯で1/4が遺存する。166は杯で1/4が遺存する。167は杯で1/4が遺存する。168は杯の底部破片で、外面に



第46図 S D10出土土器(1)



第47図 SD10出土土器(2)

「都厨」の墨書が認められる。169は坏で1/3が遺存する。170は坏で4/5が遺存する。171は坏で1/2が遺存する。172は坏で1/2が遺存する。173は須恵器の高台付の坏で1/5が遺存する。高台は貼り付けである。胎土には石英粒・蠶母粒をわずかに含む。焼成は良く、淡黄灰色を呈する。174は須恵器の坏で4/5が遺存する。胎土には石英粒を多量に含むが焼成は良い。淡灰色を呈する。175・176は坏の底部である。177は坏の底部で4/5が遺存する。外面に「天」の線刻が認められる。178は坏で3/4が遺存する。179は高台付の坏である。高台は貼り付けである。180は坏の底部で1/2が遺存する。181は甕の口縁部で1/4が遺存する。182は甕の口縁部で1/4が遺存する。183は甕の口縁部で1/4が遺存する。184は甕の口縁部で1/3が遺存する。185は甕で1/4が遺存する。186は甕の口縁部で1/4が遺存する。187は小形の甕で2/3が遺存する。188は甕の口縁部で1/4が遺存する。189は甕で2/3が遺存する。190は甕の口縁部で1/4が遺存する。191は小形の甕で3/4が遺存する。192は甕の底部で1/4が遺存する。193・194は甕の底部である。195は甕の胴下半部で1/4が遺存する。196は須恵器の長頸壺で2/3が遺存する。上半部には部分的に自然釉がのる。

SD11 (第48図)

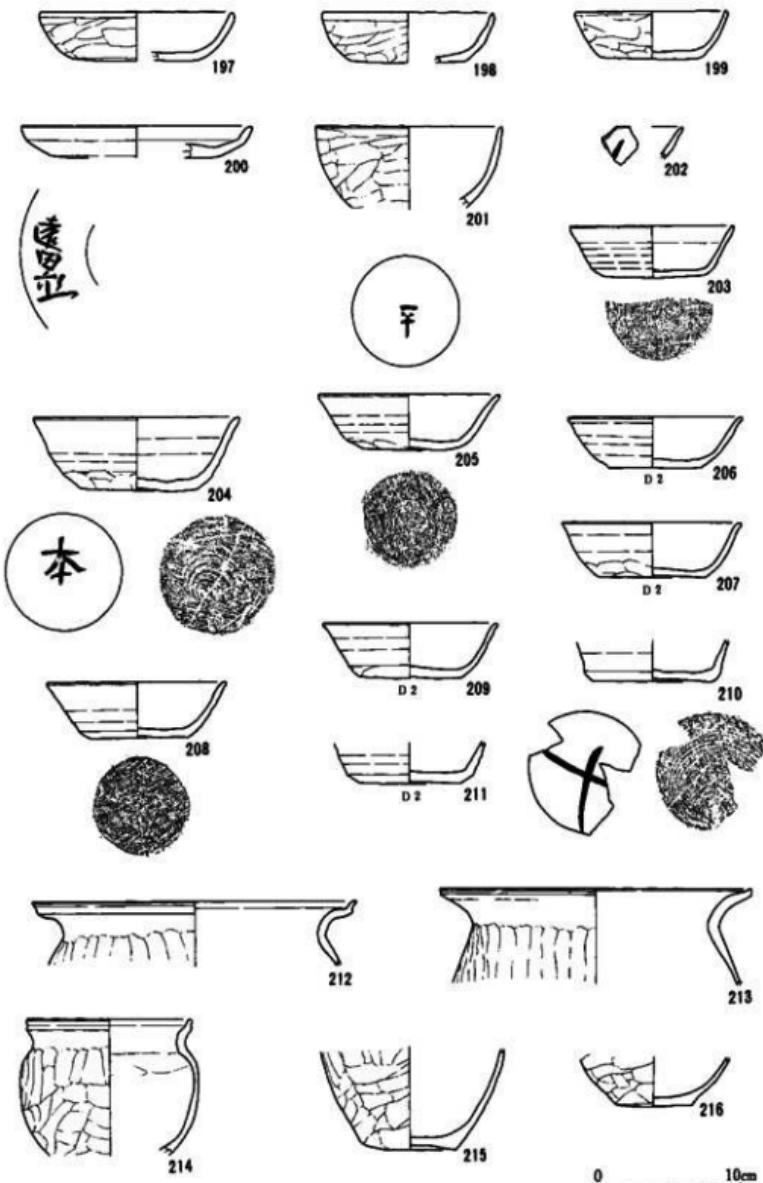
197は坏で1/4が遺存する。198は坏で1/4が遺存する。199は坏で1/2が遺存する。200は盤で2/5が遺存する。外面に「遠田煎」の墨書が認められる。201は焼で1/4が遺存する。内面はヘラミガキされる。202は坏の口縁部破片で、外面に墨書が認められる。203は坏で1/4が遺存する。204は坏で3/4が遺存する。底部外面に「卒」の墨書が認められる。205は坏で完形である。底部内面に「平」の墨書が認められる。206は坏で1/4が遺存する。207は坏で1/2が遺存する。208は坏で3/4が遺存する。209は坏で1/2が遺存する。210は坏で3/4が遺存する。底部外面に「十」の墨書が認められる。211は坏で3/4が遺存する。212は甕の口縁部で1/4が遺存する。213は甕の口縁部で1/4が遺存する。214は小形の甕で1/4が遺存する。215・216は甕の底部である。

その他の溝 (第49図)

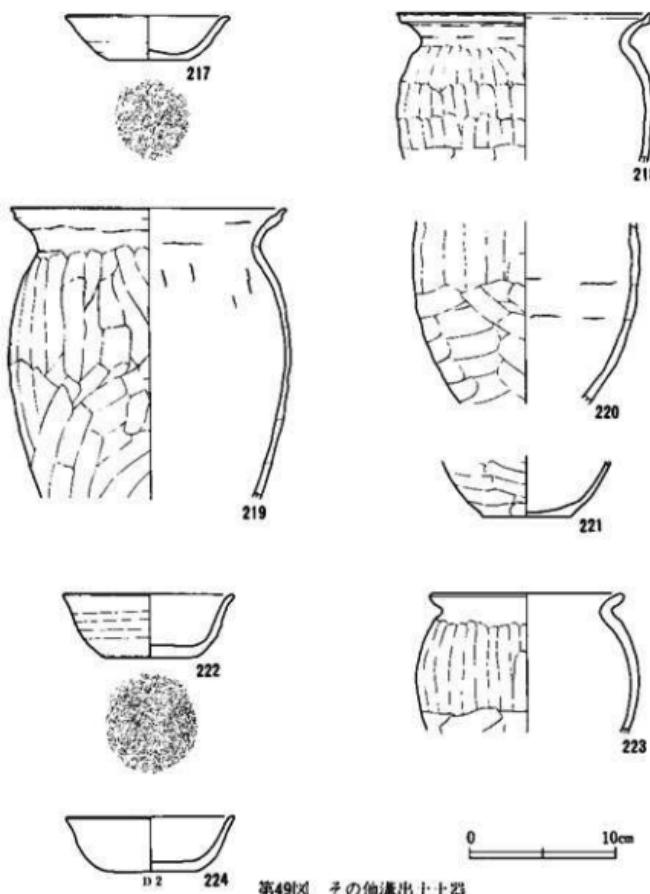
217~221はSD5と交差する溝から出土したものである。217は坏で完形である。218は甕で2/5が遺存する。219は甕で1/2が遺存する。220は甕の胴部で3/5が遺存する。221は甕の底部である。222はSD5の北側の溝から出土した坏で4/5が遺存する。223は222の出土した溝の北側の溝から出土した甕で、1/2が遺存する。224はSX1の南側の溝から出土した坏でほぼ完形である。

SX1 (第50図)

225は坏で3/4が遺存する。226は坏で1/4が遺存する。227は坏で2/3が遺存する。228は坏で2/3が遺存する。229は坏で2/5が遺存する。230は坏で2/5が遺存する。体部には「日」の墨書が認められる。231は坏で1/3が遺存する。232は坏で1/4が遺存する。233は坏の破片で、外面に「合」の墨書が認められる。234は坏の破片で外面に墨書が認められる。235は須恵器の長頸壺

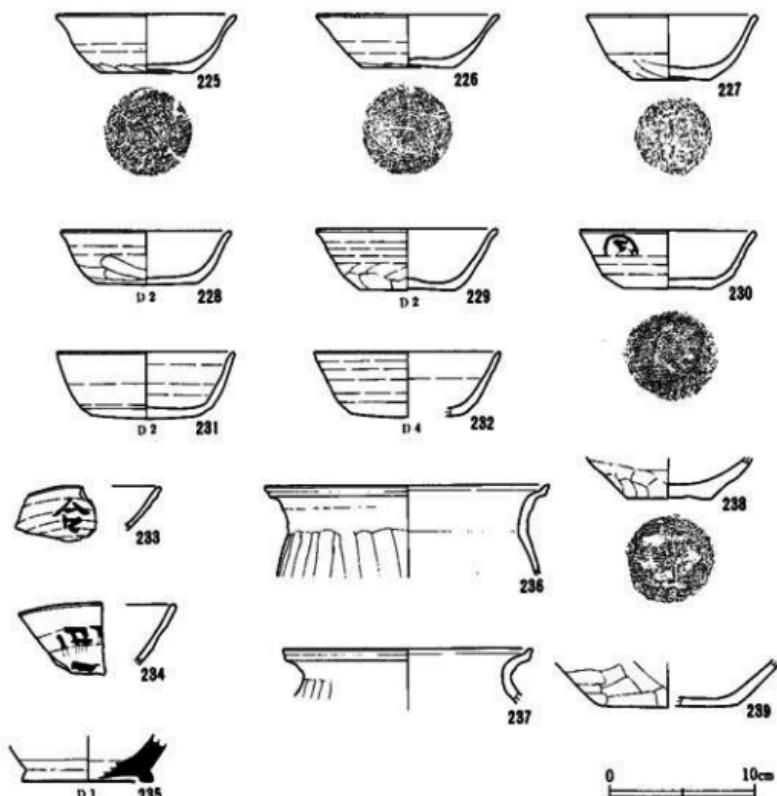


第48図 S D11出土土器



第49図 その他溝出土土器

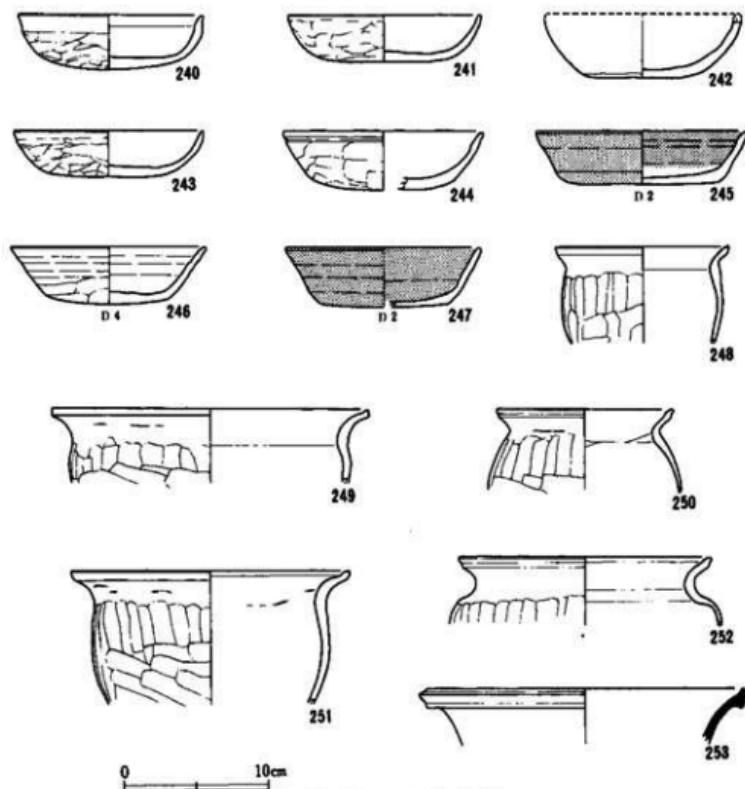
で1/4が遺存する。高台は貼り付けである。胎土には細砂粒を含むが、緻密である。焼成は良く、淡灰色を呈する。236は甕の口縁部で1/4が遺存する。237は甕の口縁部で1/4が遺存する。238は甕の底部で木葉痕を残す。239は甕の底部で1/3が遺存する。



第50図 SX 1 出土土器

S X 2 (第51図)

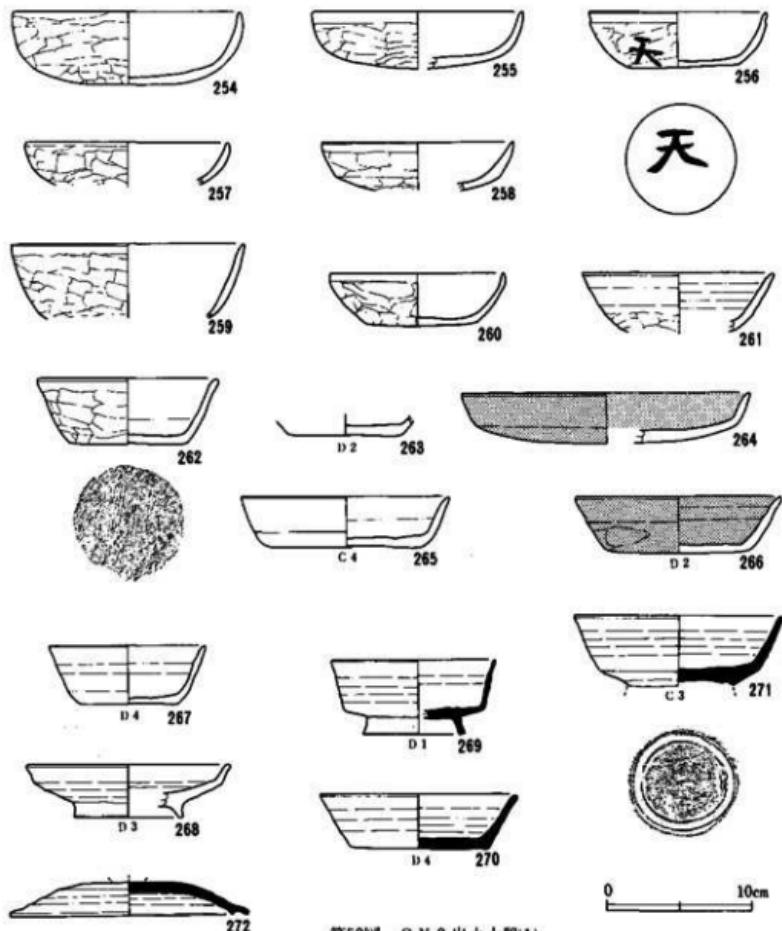
240は壺で3/4が遺存する。241は壺で1/2が遺存する。内面はヘラミガキされる。242は壺で2/3が遺存する。243は壺で3/4が遺存する。内面はヘラミガキされる。244は壺で1/4が遺存する。内面はヘラミガキがされる。245は盤状壺で1/3が遺存する。246は壺でほぼ完形である。247は壺で3/4が遺存する。248は小形の甕で1/2が遺存する。249は甕で1/4が遺存する。250は甕で2/3が遺存する。251は甕で1/4が遺存する。252は甕で1/4が遺存する。253は須恵器の甕の口縁部で1/5が遺存する。胎土には細砂粒を含むが、緻密である。焼成は良く、淡灰色を呈する。



第51図 SX 2 出土土器

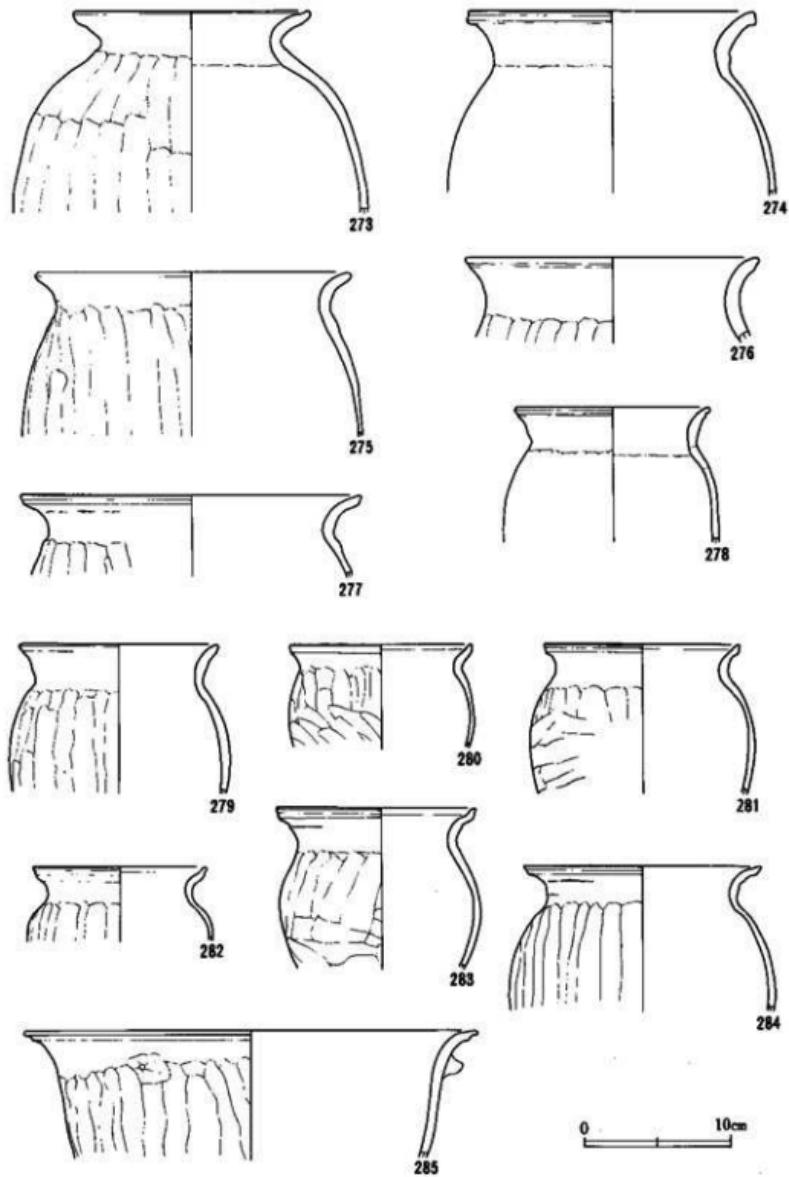
S X 3 (第52~54図)

254は壺で3/4が遺存する。内面はヘラミガキされる。255は壺で1/4が遺存する。内面はヘラミガキされる。256は壺で3/4が遺存する。体部と底部外面に「天」の墨書文字が認められる。257は壺で1/4が遺存する。内面はヘラミガキされる。258は壺で1/4が遺存する。内面はヘラミガキされる。259は壺で1/4が遺存する。内面はヘラミガキされる。260は壺で3/4が遺存する。内面はヘラミガキされる。261は壺で1/4が遺存する。262は壺で1/5が遺存する。263は壺の底部で1/2が遺存する。264は盤状壺で1/6が遺存する。内面はヘラミガキされる。265は壺で3/4が遺存する。外面は遺存状態が悪い。266は壺で1/4が遺存する。底部内面に「キ」の線刻が認められる。267は壺で1/5が遺存する。底部内面の「キ」の線刻が認められる。268は高台付の皿で1/6が遺存する。高台は貼り付けである。269は須恵器の高台付の壺で1/4が遺存する。高



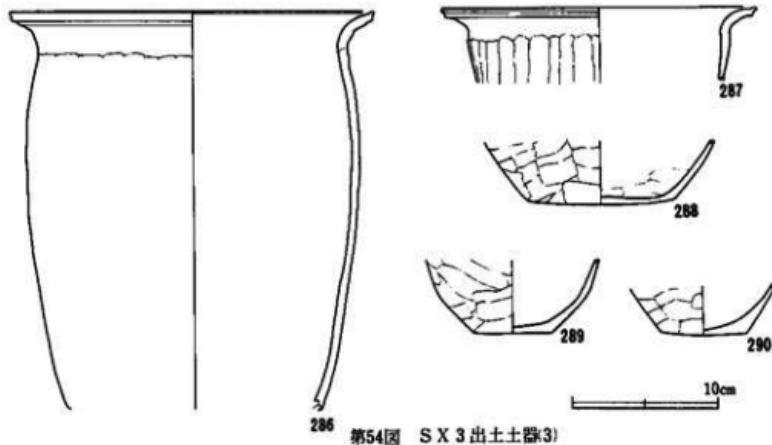
第52図 S X 3 出土土器(1)

台は貼り付けである。胎土には石英粒を多量に含むが焼成は良い。暗緑灰色を呈する。270は須恵器の杯で1/2が遺存する。胎土には雲母粒を多量に含み、焼成はやや悪い。淡灰色を呈する。271は須恵器の高台付の杯で、貼り付けによる高台部を欠く。3/5が遺存する。胎土には砂粒を多量に含むが、焼成は良い、淡灰色を呈する。272は須恵器の蓋でつまみを失する。ほぼ完形である。胎土には砂粒を多く含み、焼成もやや悪い。淡灰色を呈する。273は甕で1/2が遺存する。274は甕で1/3が遺存する。275は甕で1/2が遺存する。276は甕の口縁部で1/4が遺存する。277は甕の口縁部で1/5が遺存する。278は甕で2/3が遺存する。279は甕で3/4が遺存する。



第53図 S X 3 出土土器(2)

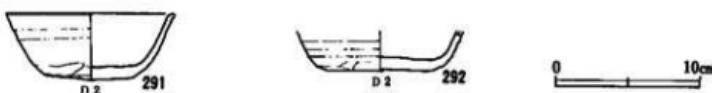
280は甕で4/5が遺存する。281は甕で1/4が遺存する。282は甕で1/3が遺存する。283は甕で2/3が遺存する。284は甕で1/2が遺存する。285は瓶で2/5が遺存する。286は瓶で1/4が遺存する。287は瓶で1/4が遺存する。288は甕の底部で1/2が遺存する。289は甕の底部で3/4が遺存する。290は甕の底部である。



第54図 S X 3 出土土器(3)

S R 1 (第55図)

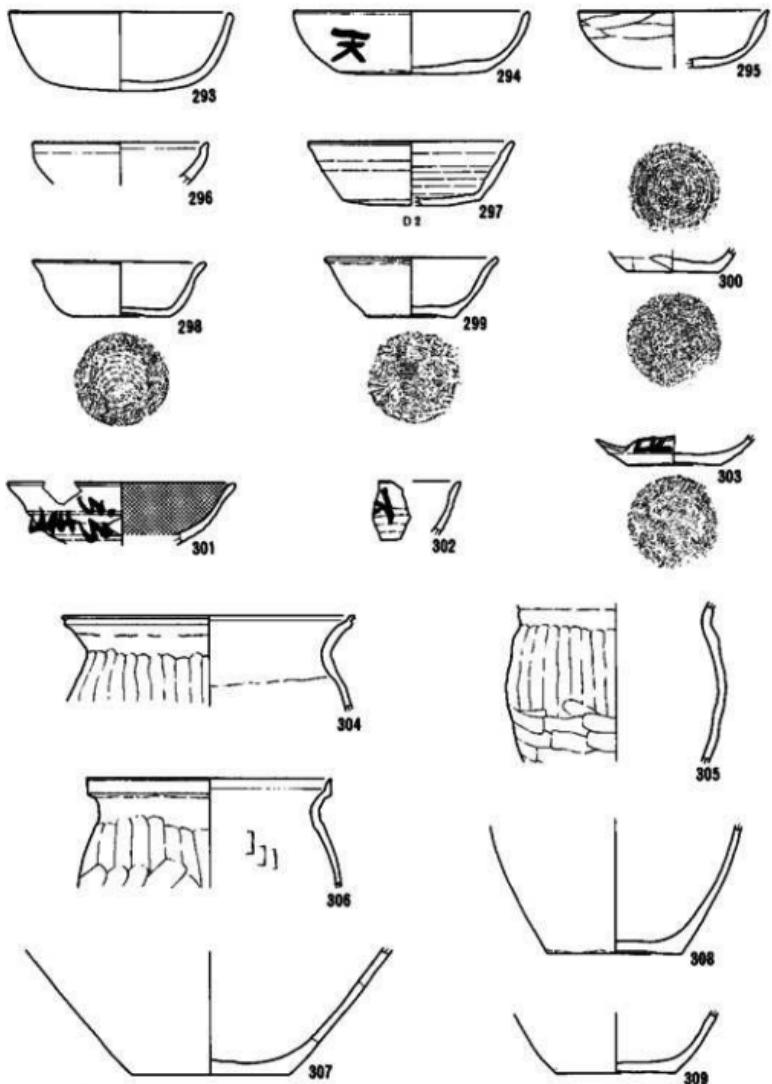
291は杯で1/2が遺存する。292は杯で1/2が遺存する。



第55図 S R 1 出土土器

遺構外出土土器 (第56~58図)

293~309は西区、310~322は東区出土のものである。293は杯で4/5が遺存する。内面はヘラミガキされる。294は杯で1/4が遺存する。内面はヘラミガキされる。外面には「天」の墨書き文字が認められる。295は杯で1/4が遺存する。内面はヘラミガキされる。296は杯で1/2が遺存する。内面はヘラミガキされる。297は杯で1/2が遺存する。298は杯で2/3が遺存する。299は杯で2/3が遺存する。300は杯の底部で、内面に「大」の線刻が認められる。301は杯で1/3が遺存

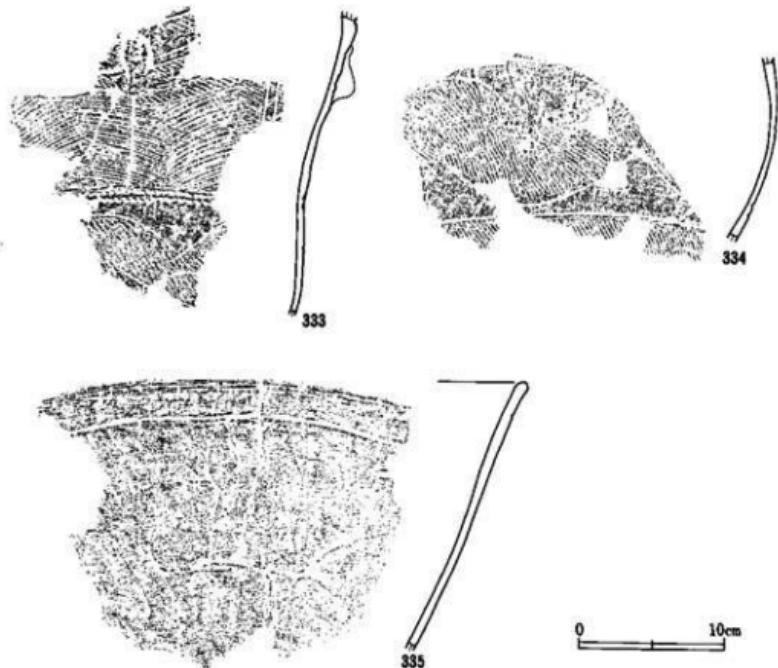


第56図 造構外出土土器(1)



第57図 遺構外出土土器(2)

する。内面はヘラミガキされる。内黒土器である。外面に「□弘寺」の墨書文字が認められる。302は壺の破片で、外面に墨書が認められる。303は壺の底部で、外面に墨書が認められる。304は甕で2/5が遺存する。305は甕で1/2が遺存する。306は甕で1/2が遺存する。307～309は甕の底部である。310は壺で2/3が遺存する。内面はヘラミガキされる。311は壺で2/3が遺存する。内面はヘラミガキされる。312は壺で1/3が遺存する。313は壺で3/4が遺存する。底部外面に「大道上」の墨書文字が認められる。314は高台付の壺である。高台は貼り付けで、内面には接合時の爪形圧痕が残り、「玉長」の墨書文字が認められる。315は高台付の壺で1/4が遺存する。高台は貼り付けである。316は高台付の壺の高台部である。高台は貼り付けである。317は壺で1/3が遺存する。318は壺の底部である。319は壺で2/5が遺存する。320は壺の底部である。321は壺の底部である。322は須恵器の長頸壺で1/2が遺存する。高台は貼り付けである。胎土には砂粒を多量に含むが、焼成は良い。淡黄灰色を呈する。323は壺で2/5が遺存する。外面に墨書が認められる。324～325は壺の破片で、墨書が認められる。326～327は壺の底部破片で、墨書が認められる。328は甕で2/3が遺存する。329は甕の口縁部で3/5が遺存する。330は甕で1/2が遺存する。331は小形の甕で2/3が遺存する。332は甕の底部で2/3が遺存する。333～335は繩文式土器である。今回の調査において繩文式土器の出土は極めて少なく、図示したものがすべて



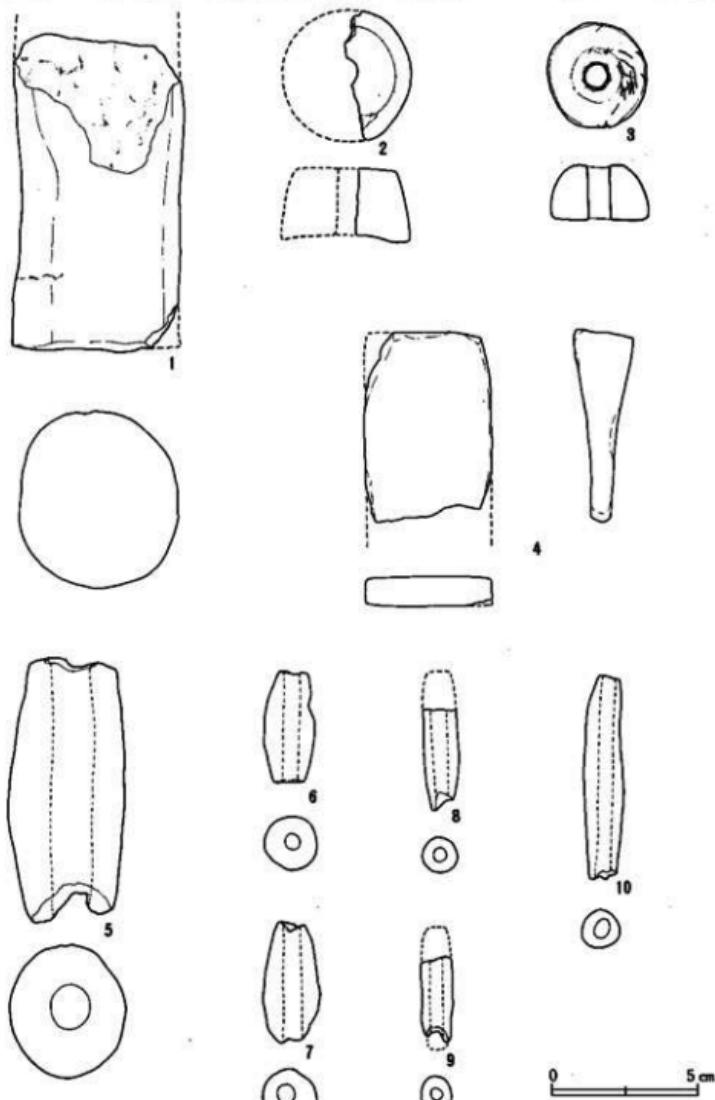
第58(3) 遺構外出土器(3)

であると言つてもいい。333は深鉢で、口縁部を消失するが、波状口縁になるものと思われる。口縁部文様帯は3列の繩文帯で、比較的高さのある突起がつく。胴部上半は弧状の条線が描かれ、さらに突起の下には縦方向の沈線が描かれる。胴部中位のくびれ部には2列の刻目文が施される。胴部下半は互い違いの弧線文による磨消繩文帯となる。334は深鉢の胴部下半である。沈線で区画された間が、互い違いの弧線文による磨消繩文帯となり、それ以下は繩文帯となる。335は深鉢で、口縁部に沈線が施される以外無文となるものである。

2. その他の遺物（第59～60図）

土製品・石製品（第59図）

1はSX1から出土した土製支脚である。一方の端部を欠失する。全体がナデ調整によって仕上げられている。胎土には砂粒を多量に含む。二次的な火はほとんど受けておらず、遺存状



第59図 土製品・石製品（1/2）

態は良い。2はSD10から出土した土製鉄鏹車の半欠品である。全体が丁寧なナデ調整によって仕上げられている。胎土には砂粒を多量に含む。3はSI5から出土した石製鉄鏹車である。完形品。4はSI4から出土した砥石である。一方の端部を欠失する。各面とも著しい使用的な跡が認められる。5はSR1から出土した大形の土鏹である。6はSI4から出土した土鏹である。7~10はグリッドから出土した土鏹である。

古銭（第60図）

1は聖宋元宝、2は寛永通宝でいずれもグリッド出土のものである。



第60図 古銭（1/1）

3. 貝層サンプル出土の貝類資料

(1) 資料の採取集計方法

今回の分析資料は、SX3とした土坑の貝層から採取したサンプルを水洗・分離して得た資料である。以下サンプルの採取、水洗および集計・計測方法について簡単に説明する。

サンプルの採取

SX3の貝層のうち、遺存状態の良好な部分を選んで採取地点を設定し、柱状サンプルを採取した。サンプルの平面形は一辺の長さが0.5mの正方形とし、貝層最上面から水平に0.1mごとに切り取ったものを1単位とした。サンプルには上層から切り取った順に①から番号を付けてサンプル番号とした。

サンプルの水洗・乾燥、同定

網目の大さが9.52、4.0、2.0、1.0mmの4種類のステンレス製同規試験フルイを用いて水洗を行なった。各網目上における分離物は乾燥後に白紙上に広げてのばし、この中から肉眼的に識別しうる資料を採集した。なお同定にあたっては、小宮孟の教示を得た。

集計・計測

資料の集計は9.52と4.0mmの網目上で分離したもののうち、腹足綱は体層を保存するもの、二枚貝綱は主歯を保存するものを集計し、同時に貝種別の計量も行なった。なお、微小な陸産貝類については、2.0mm以下の網目上の分離物も集計対象とし、計量も行なった。計測は資料のうち主体を占めるチョウセンハマグリとダンベイキサゴおよびフジノハナガイについて行った。計測部位は、チョウセンハマグリ・フジノハナガイが殻長、ダンベイキサゴが殻長である。なお、殻の一部が欠損している資料でも、無理なく原形が復元できるものについては、推定値を測った。

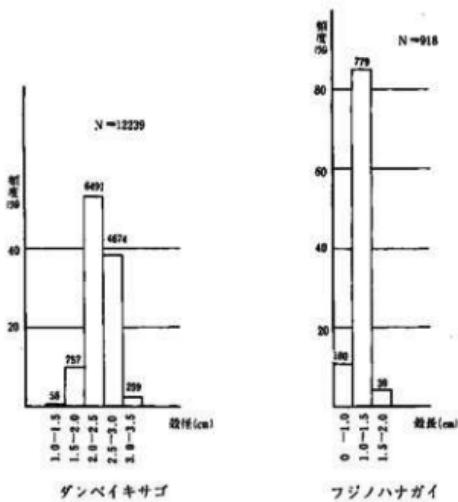
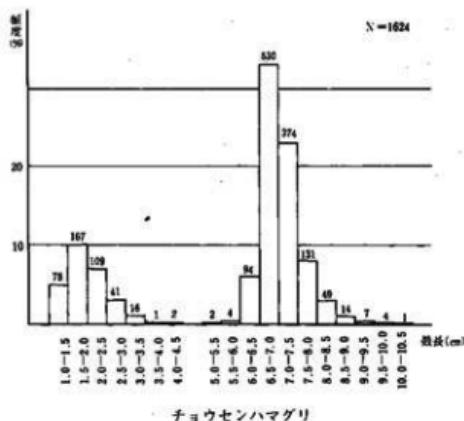
(2) 同定結果

今回調査したサンプルからは以下に示す貝類資料が採集された。

S X 3 貝層サンプル貝類同定結果

種名	+ - プレ番号							最小標本数 左-右	二枚貝綱 左-右	相対頻 (%)	重合 (g)	相対重 (%)
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦					
ダンベイキサゴ <i>Umbonium/Schistium/giganteum</i>	2091	827	1205	4399	3899	559	14	12994	92.2	57325	60.6	
ワタガレイ <i>Nucella/Glaucus/obliqua</i>	1							1	0.0	0.5	0.0	
ワタガレイ属未定 <i>Nucellidae gen. & sp. indet.</i>					3			3	0.0	0.5	0.0	
腹足綱不明 <i>Gastropoda spp.</i>		1	3	3				7	0.0	2.7	0.0	
チョウセンハマグリ <i>Mytilus/Mytilus/maius</i>	右 213	79	159	153				604	596-604	4.28	24851	30.1
アシカヒメイガイ <i>Astarte/leucosticta</i>	左 223	76	158	139								
アシカヒメイガイ <i>Astarte/leucosticta</i>	右 132	174	20	77	12			457	457-415	3.24	19.2	0.0
クモドコノミ <i>Chlamys/crenularis</i>	左 146	187	22	99	3							
ナミコロナガイ <i>Latona/costata</i>					1			1	0.0	0.1	0.0	
ワタガレイ <i>Cassidina/pigra</i>	1							1	0.0	34	0.0	
セトウセイガイ <i>Sopherita/stevii</i>		1						1	0.0	26	0.0	
コクツコガイ <i>Glyptodon/thereti/teretulus</i>	5	2						7	0.0	17.5	0.0	
ワタガレイ <i>Glycymeris/sericea</i>			2					2	0.0	0.0	1.3	0.0
バカラガイ <i>Murex/rhinoceras</i>		1						1	0.0	0.1	0.0	
シジミ・監門鶴・不明 <i>Cardita/lemairei/gen. & sp. indet.</i>	右 10	右 1						12	1-12	0.0	6.2	0.0
ウツラジロ <i>Feliniella/nana</i>	右 1							1	0-1	0.0	0.6	0.0
セカイ・ウツラジロ <i>Allapेटa/bystrenoides</i>	cc	cc	cc	cc	cc	*	cc	*	*	*	*	*
右端毛脚螺・不明 <i>Pulmonaria/gen. & sp. indet.</i>	cc	cc	cc	cc	cc	c	cc	*	*	*	*	*
合計								14992	99.72	82325.8	99.7	

*CC : 多い C : 少ない



グラフ内の数字は頻度数を示す。

第61図 チョウセンハマグリ・ダンベイキサゴ・フジノハナガイの計測結果

(3)まとめ

今回分析した貝層は、伴出した土器から8世紀初頭を中心とするものと考えられる。その内容は平木遺跡の生活を復元する上で重要な資料となった。同定結果によると、主体を占めるのはダンベイキサゴとチョウセンハマグリである。この他数量の上ではフジノハナガイが目立つが、重量から考えると、有用なものとすることはできない。ダンベイキサゴは殻径2.5cm前後のものが主体を占める。一方チョウセンハマグリは、殻長2.0cm前後と7.0cm前後のものが主体を占める、いわゆる双峰型の殻長分布を示している。これは、その用途はともかくとして、大形のもののに小形のものをも選択して捕獲していたものと考えられる。これをフジノハナガイと比較すると、チョウセンハマグリの小形のものとほぼ重なっていることがわかる。これは、小形のチョウセンハマグリを捕獲する際に有用でないフジノハナガイをも同時に捕獲してしまった結果と考えられる。このように平木遺跡に貝層を残した人々は、ダンベイキサゴと大形・小形のチョウセンハマグリを主体的に捕獲していたのである。

V.まとめ

今回の調査は從来我々があまり経験したことのない微高地を対象としたものであった。したがって、調査に入る前は、果たして遺構を明確にとらえることができるのかという不安があった。しかし、調査の結果、検出にやや手間だったものの、住居跡をはじめとする遺構を検出することができた。さらには出土遺物は我々の予想をはるかに上回るものであり、多量の墨書き土器を中心とする土器群の内容は多くの問題を提起している。ここでは得られた成果を整理し、一応のまとめを行なっておきたいと思う。

1. 繩文式土器

今回の調査で出土した遺物のうち99%は土器が占め、さらにその大半は土師器である。繩文式土器は極めて少なく、図示した3個体の土器がほとんどすべてであると言ってよい。量的には極めて少ないが、この繩文式土器は砂堤群の形成を考える上で重要な意味を持っている。平木遺跡がのる砂堤群は、九十九里浜平野にある10数列の砂堤を3群に区分したときに、第Ⅱ砂堤群と呼ばれている。この第Ⅱ砂堤群のうち、台地側の一部は遅くとも繩文時代後期には形成されていたといわれてきた（註1）。これは砂堤上の遺跡の表採土器やボーリングによって得られた試料の¹⁴C年代等を総合したものである。今回出土した土器は、後期後半～後期末と考えられ、この時期には平木遺跡は明らかの人間活動の舞台となっていたことが明らかとなつた。したがってこの時期には既に砂堤は形成されており、從来の説を補強することとなった。表採資料ではなく、発掘調査によって得られた資料だけに、その価値は極めて大きいと言えよう。

2. 8・9世紀の土器

このように平木遺跡は繩文時代後期には既に明らかの人間活動の舞台になっていたことが明らかとなつたが、本格的な生活が営まれるのは8世紀に入ってからである。今回の調査で出土した土器の大半は8・9世紀の土器である。これらの土器の多くは、溝や井戸等から出土したもので、その性格や出土状態等からして、住居跡出土の一括資料と同列に扱うことはできない。したがってここでは、器種構成の変化をもとに、從来の編年観を参考にして大きな時期区分を試みた。

I期

SX2・3、SD5・9・10出土土器である。この他SI2、SD1・7出土土器もほぼこの時期に含まれる。杯は器高が低く丸底で、体部がヘラケズリされるものが主体を占める。この他盤状杯も伴う。須恵器は形態・胎土・技法等から何種類かに分けられ、搬入品の他在地で生産されたと考えられるものもあり、土器生産の上で重要な時期となる。

II期

SD11出土土器である。この他SE1出土土器もこの時期に含まれる。SD11出土土器のう

ち、I期に含まれるもの(200)もあるが、主体となるのはこの時期のものである。杯はI期で主体を占めたものは少くなり、ロクロ土師器が主体を占めるようになる。

III期

S D 2・6出土土器をこの時期としたが、良好な資料がなく、詳細は不明である。

IV期

S D 13・17出土土器をこの時期としたが、良好な資料がなく、詳細は不明である。

V期

S I 1・4、S X 1出土土器である。杯はロクロ未使用のものが再び出現する(1)。ロクロ土師器の底部調整もやや簡略化され、ヘラケズリの幅も狭くなる。

この他大量の土器を出土したS E 4は、その性格からか出土土器の時期はかなり幅があり、III～V期にわたっているが、主体となるのはIV期と考えられる。

以上土師器の杯を手がかりにして、I～V期に大まかに分けた。次に各時期の年代が問題となる。I期はロクロ未使用の杯と盤状杯から8世紀第2～第3四半期としたい。ただ鬼高式土器の特徴をよく残す杯(155)やかえりを有する須恵器蓋(272)など7世紀末の様相を示す土器も存在する。II期はロクロ未使用の杯にかわってロクロ使用の土師器が主体を占めることから8世紀第四半期としたい。V期はロクロ未使用杯の再出現、ロクロ土師器の底部調整技法が次第に簡略化しつつあることから9世紀後半としたい。その他の時期は良好な資料がないため、前後の年代から推定して、各期の年代を次のように考えたい。

I期 8世紀第2～第3四半期

II期 8世紀第4四半期

III期 9世紀前半

IV期 9世紀中葉

V期 9世紀後半

3. 遺構の展開

以上の土器の編年から遺構の展開をみると次のようになる。

I期 S X 2・3、S D 5・9・10、S I 2・S D 1・7

II期 S D 11、S E 1

III期 S D 2・6

IV期 S D 13・17

V期 S I 1・4、S X 1

住居跡は6軒検出された。S I 1の南側は調査の時点で既に削平されていたが、この部分は今回の調査範囲の中で最も標高が高く、水はけもいい部分である。したがってこの部分に住居跡が存在した可能性が高い。住居跡内の諸施設については明らかにすることはできなかった。

これについては、調査方法も含めて今後の課題としたい。

井戸は4基検出された。SE4以外は明確な時期を決定できない。SE1とSE2はその構造からして、同時期のものと考えられるが、規模・出土遺物等からしてSE4とは異なる性格を考えなければならない。SE4は、土器の出土状態からして9世紀第1四半期から第4四半期にわたって使用されたものと考えられる。

掘立柱建物跡は7棟検出された。いずれも出土遺物ではなく、明確な時期が決定できないが、切り合いもあり、一時期のものではない。ここでは、主軸の方向、位置関係から一応3期に分けたいと思う。I期 SB2 II期 SB1・4・7 III期 SB3・5・6である。仮に各時期を25年とすれば、70~80年間にわたって営まれたことになる。これらの掘立柱建物跡とSE4とは、その位置関係などからして、極めて関係が深いと考えられる。もしそうだとすれば、SE4出土土器の示す年代幅と掘立柱建物跡の時期区分はほぼ対応しているといえよう。決定的な根拠には欠けるものの、ここではSE4と掘立柱建物跡は同時期のものと考えておきたい。

溝はSD6のような大規模なものをはじめとして、多数検出された。溝の機能については十分明らかにすることはできなかった。ただ溝中から多量の土器が出土する溝が多く、大半が溝底よりかなり浮いていることから、最終的には溝が土器を投棄する場所とされたものと思われる。

溝のうち、細くて浅い溝が平行して並んで群をなしている遺構を畠状小溝とした。明確なものはSX1の北側のものだけが、これ以外にも存在する可能性が高い。こうした遺構は、群馬県(註2)をはじめ、新潟県(註3)、石川県、山形県、静岡県などで検出され、畠と考えられている。時期は伴出遺物が全くないため不明であるが、9世紀後半であるSX1よりは古く、他の溝とはほとんど重複せず、方向もほぼ南北方向であることから、主軸の方向がほぼ南北を指す掘立柱建物跡との関係も考えられる。いずれにしても9世紀代の遺構と考えられる。今回検出されたのは偶然とも言うべきだが、千葉県においては微高地の調査が進めば検出される可能性が高い。

その他SX1は水溜状の遺構と考えた。9世紀後半にはこうした遺構が構築され、前述の畠とともに、微高地上の開発が進み、農業生産が行なわれていたものと思われる。

SX2・3は土坑で、SX3には大量の貝が投棄されている。時期的には8世紀前半で、SI2および削平部分に存在したであろう住居跡で構成される集落が、ダンベイキサゴとチヨウセンハマグリを集中的に採集していたものと考えられる。

4. 結語—平木遺跡の性格—

以上述べてきたことによって、遺構・遺物の実態はある程度明らかになったものと思われる。さてここで遺跡の性格を考える場合に問題となるのは、SE4および掘立柱建物跡と、「郡尉」

をはじめとする多量の墨書き土器であろう。今回の調査では「郡厨」と考えられる土器が3点出土した。県内において「厨」の墨書き土器を出土する遺跡は9遺跡（註4）あり、決して少ない文字ではない。このうち郡衙とされる遺跡、例えば埴生郡衙と推定される印旛郡栄町大畠遺跡から出土するのは当然としても、郡衙との関わりを明らかにできない遺跡、例えば香取郡山田町妙名遺跡や佐倉市腰巻遺跡からも出土しているのも事実である。また市原市坊作遺跡出土の「海上厨」の墨書き土器のように、隣都から明らかに搬入された例（註5）もあり、「厨」の墨書き土器の出土をもって直ちに郡衙関係の遺跡と結びつけて考えることはできない。墨書き土器だけをとり上げるのではなく、それが出土した遺構も含めて遺跡全体の中でその性格を考えるべきである。ただしSE4から出土した「庵（序）」の墨書き土器の存在には十分注意しておきたいと思う。

そこでまず遺構の検討から始めてみたい。今回の調査では4基の井戸が検出された。このうちのSE4は、その規模・構造および出土遺物から他の3基とは異なった性格のものと考えざるを得ない。多量の墨書き土器を含む数十点の完形または完形に近い土師器の杯が出土したこと、およびその墨書きの内容から考えると、この井戸は通常の集落に伴うものとは考えられない。確かに墨書き土器は遺跡全体から出土しているが、その大半はSE4出土であり、その中に「郡厨」や「序」の墨書き土器が存在することは（註6）、この井戸が郡衙に何らかの関係があることを示している。既に述べたように、このSE4とその北側に位置する掘立柱建物跡は極めて関係が深いと考えられるので、この井戸と掘立柱建物を合わせて遺跡の性格を考えなければならぬ。この建物の柱穴の掘方は0.5m前後と小規模で、建物全体の規模も小規模であるが、方位はほぼ北で一定しており、その配置もL字型ないしはコ字型となっており、通常の集落とは考えにくい。とすればSE4出土の墨書き土器と掘立柱建物跡から、この遺跡が郡衙ではないのかという問題がでてくる。郡衙は基本的には、正倉・郡庁・館・厨家等の機能の異なる建物群数群で構成されていたといわれている（註7）。本遺跡の場合、正倉や郡庁とすることはできない。とすれば館あるいは厨家の可能性はどうかということになる。館に厨が付属する場合も考えられるので、館と厨家を遺構の上から綴別することは容易ではないといわれる。しかし、館と厨家とを比較した場合、その機能は根本的に異なるものであり、仮に館が給食機能をも備えていたとしても、厨家においてより実務的な建物が存在したことは事実であろう。本遺跡の建物は、従来館および厨家とされる遺構と比較した場合、厨家とされる遺構により近いと言えよう。また「厨家は、井戸をともなったり、水を得やすい場所を占めたりする場合が多かった」（註8）とする一般的な傾向と合致し、多量の土器の出土は給食機能が行われた結果と考えられ、「郡厨」の墨書き土器の出土を考えあわせると、本遺跡は厨家の可能性が高いと言えよう。

このように遺構・遺物の面からは厨家の可能性が高いわけだが、こうした遺跡と認定するにはこの他に歴史的・地理的条件も満たされなくてはならない。したがって他の面からのアプローチ

ローチが必要となる。例えば、本遺跡が果たして当時の交通の要衝に立地していたのかという古代の交通路の問題、また、仮に厨家だとすれば、こうした微高地上に厨家が営まれるようになった背景（古代の開発と深く関わってくるか）の問題などがあげられる（註9）。ただどちらの問題も今後の研究の進展を待たねばならない。この他、古くから行なわれてきた地名を基に匝瑳郡を復元する方法もある。地名の比定には諸説あり、匝瑳郡衙・匝瑳郷の位置は確定できていない。いずれにしても、単独の方法では古代匝瑳郡を復元することは不可能で、今回の調査を契機に総合的な研究を進める必要がある。

以上のことからして、平木遺跡はSE4と掘立柱建物跡出土土器が示す時期において、通常の集落とは考えられず、厨家あるいはそれに準じた、群衆と深い関わりを持つ遺跡であったと考えられる。

近年群衆関係の遺跡が多く調査され、その実態も次第に明らかになりつつある。それによれば、群衆関係の遺跡はある一面で共通した姿を見せている一方で、地域の実態（政治的・歴史的・地理的）に合わせて多様な方をも示していることが明らかとなった。したがって、現在判明している郡衙関係の遺跡が郡衙関係の遺跡の実態のすべてではないわけで、今後は調査例にとらわれず多面的な研究を進めていく必要がある。匝瑳郡について言えば、微高地上の遺跡の実態を明らかにすることが大きな意味を持つものと思われる。その場合考古学の果たす役割は大きいが、こうした微高地上においていかに適確に遺構をとらえるかが大きな課題となろう。残された課題は多く、遺跡の性格は今後の調査・研究によって検証されなければならないが、こうした微高地上に確實に遺跡が存在することが証明できたことは、今回の調査の大きな成果と言えよう。

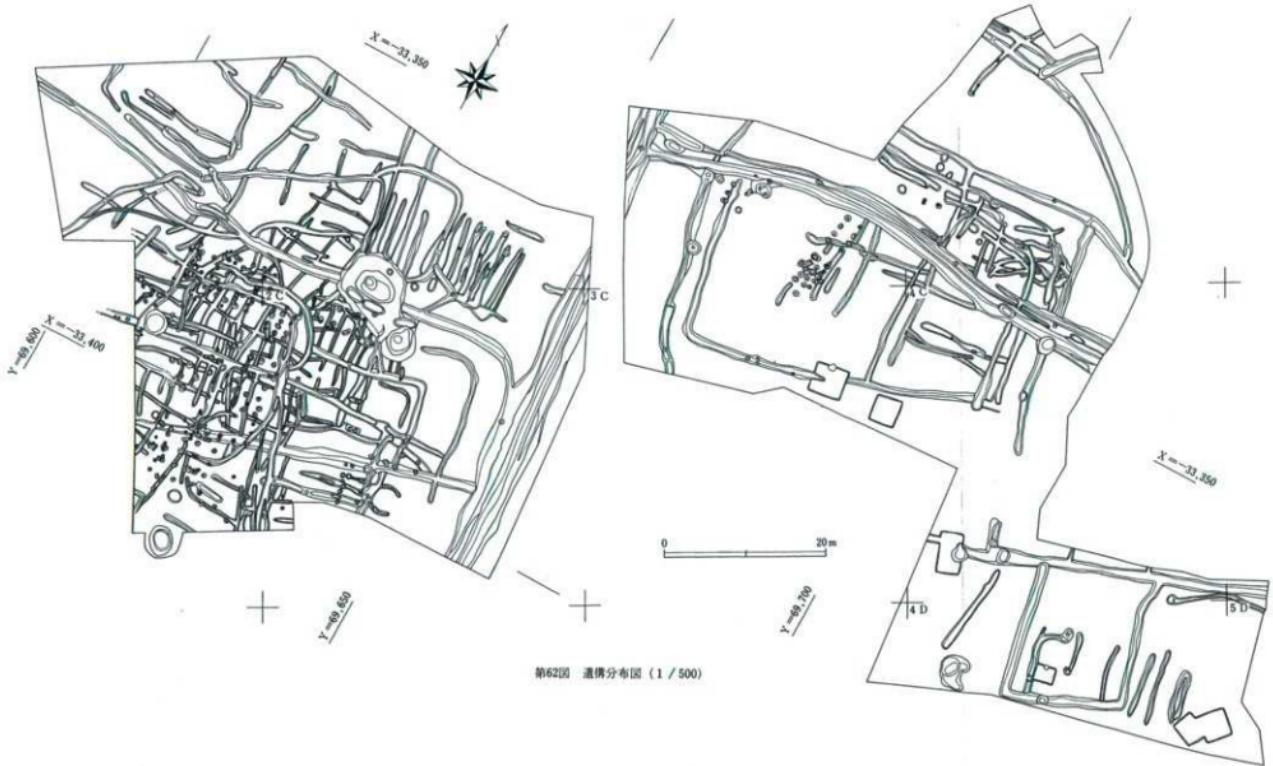
註

- (1) 森脇1979
- (2) 能登1983によれば17ヶ所の遺跡で畠が検出されている。
- (3) 板井他1986によれば3ヶ所の遺跡で畠が検出されている。
- (4) 大野1987によれば8遺跡であるが、最近佐倉市腰巻遺跡22号住居跡から出土していることが明らかとなった。
- (5) 宮本1981
- (6) 当然のことながら、こうした墨書き土器が他の遺跡から持ち運ばれた可能性も考慮に入れなければならない。実際、食器の移動を示す出土例もあるが、本遺跡の場合、遺跡全体の中で考えた場合、その可能性は低いものと考えられる。仮に他の遺跡から持ち運ばれたとしても、郡衙と関わりが深いことに変わりはない。
- (7) 山中1984
- (8) 前掲註(6)

(9) この点について、伊藤一男氏は遺跡の分布から平安時代に広域な開発が進められたと考えている（伊藤一男1981）。

引用・参考文献

- 伊藤一男 1981 『荒久台遺跡』 横芝町教育委員会
- 大野康男 1987 『栄町壇生郡衙跡確認調査報告書Ⅱ』 千葉県文化財センター
- 国土地理院 1979 『1：25000 土地条件図 八日市場』
- 国土地理院 1987 『1：25000 土地条件図 九十九里』
- 史館同人 1983 『シンボジウム資料 房総における奈良・平安時代の土器』
- 坂井秀弥他 1986 『北陸自動車道 上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅱ』 新潟県教育委員会
- 千葉県文化財センター 1986 『千葉県埋蔵文化財分布地図(2) 一千葉市・香取・海上・匝瑳・山武地区一』
- 野栄町 1985 『野栄町史 通史編』
- 能登健 1983 「群馬県下における埋没田畠調査の現状と課題」 『群馬県史研究 17』
- 房総歴史考古学研究会 1987 『房総における歴史時代土器の研究』
- 宮本敬一 1981 「最近の調査成果から見た上総国分尼寺の伽藍と付属諸院(3)」 『月刊歴史教育 3-11』
- 森脇広 1979 「九十九里浜平野の地形発達史」 『第四紀研究 18-1』
- 山中敏史 1979 「國府・群衙跡調査の歴史」 『仏教芸術 124』
- 山中敏史・岩本正二 1979 「古代地方官衙遺跡関係文献目録」 『埋蔵文化財ニュース 18-19』
- 山中敏史 1984 「遺跡からみた群衙の構造」 『日本古代の都城と国家』
- 山中敏史 1984 「國衙・群衙の構造と変遷」 『講座 日本の歴史2 古代2』
- 山中敏史・佐藤興治 1985 『古代日本を発掘する 5 古代の役所』
- 八日市場市 1982 『八日市場市史 上巻』



第62図 滝湧分布図 (1 / 500)

写 真 図 版



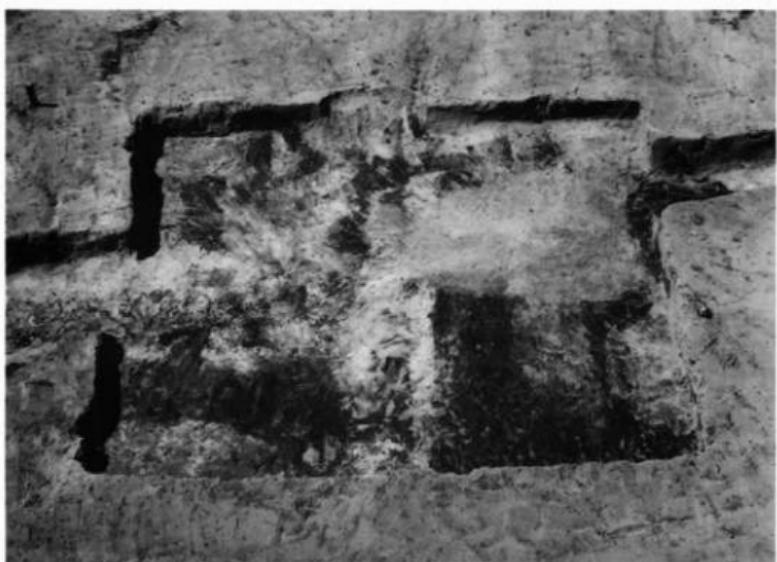
圖版 2



1. 調查前遺跡近景



2. 調查前遺跡近景



1. S I 1



2. S I 2

図版 4



1. S 13



2. S 14, 5



1. S I 6

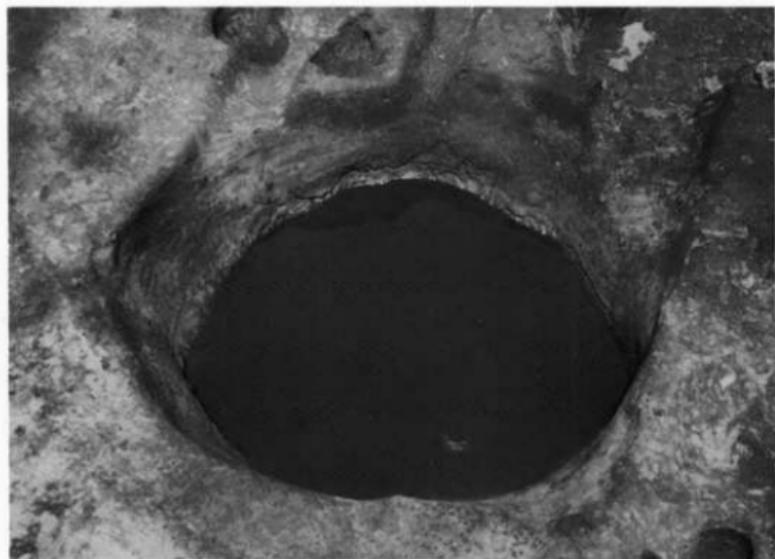


2. S E 1

図版 6



1. SE2



2. SE3

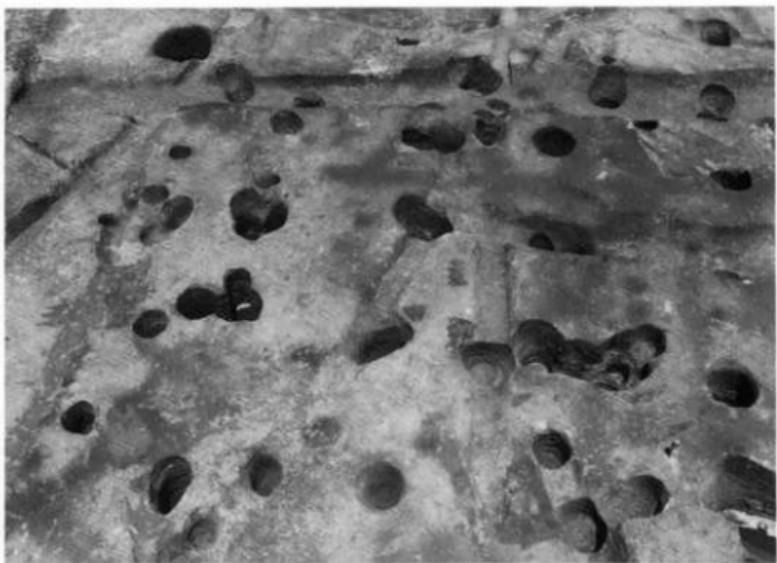


1. SE4 土器出土状況



2. SE4

図版 8



1. SB1, 2, 3



2. SB4, 5



1. SB6, 7



2. SD6

図版10



1. SE 3周辺



2. SX 1, 瓦状小溝周辺



1. SD3, 4周辺



2. SD5周辺

図版12



1. SD 7, 8, 12



2. SD 9, 10, 11



1. SD1土器出土状況



2. SD5土器出土状況

図版14



1. SD 5 土器出土状況



2. SD 9 土器出土状況



1. SX1 北半

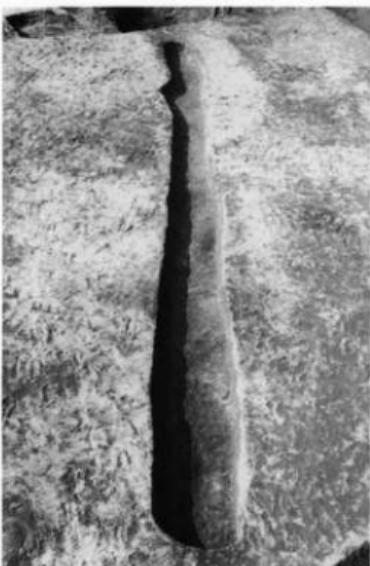


2. SX1 南半

図版16



1. SX2



2. SX3



図版 17



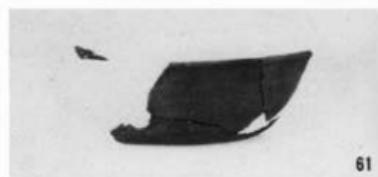
出土土器

圖版 18



出土土器

図版 19



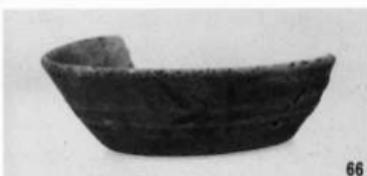
61



62



63



66



67



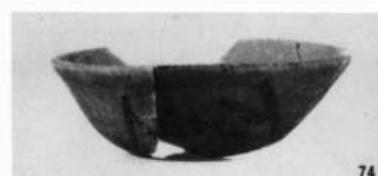
68



72



73



74



96



97

出土土器

図版 20



100



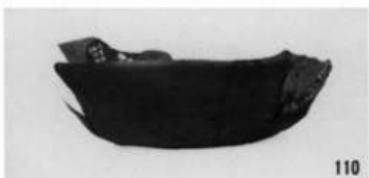
106



107



109



110



112



113



115



116



117

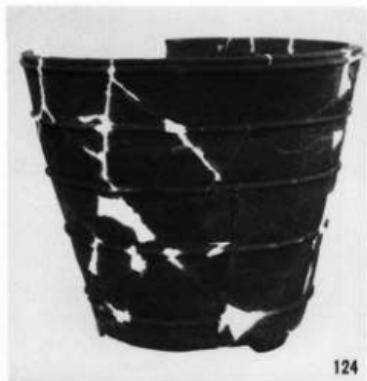


125



126

出土土器



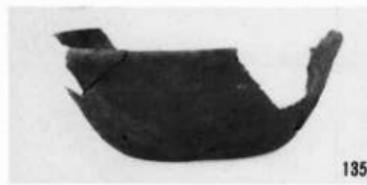
134



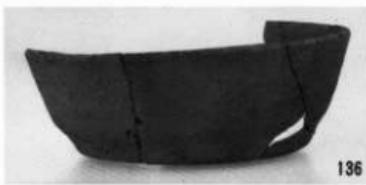
132



134



135



136



138



139



140



144

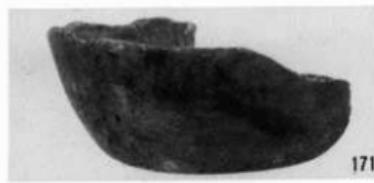
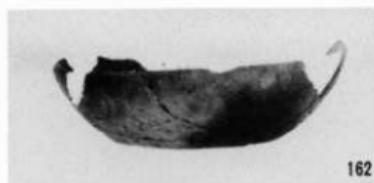
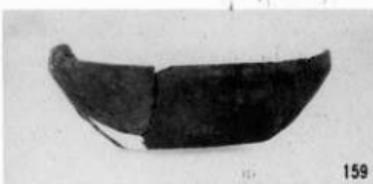
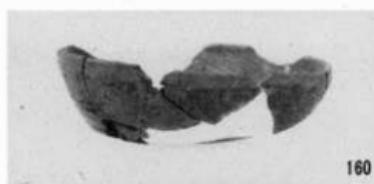


145



146

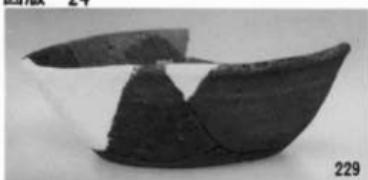
図版 22



出土土器



図版 24



229



240



241



243



246



248



254



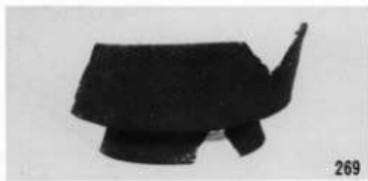
256



260



283



269



出土土器



270



271



293



297



298



299



310



311



313



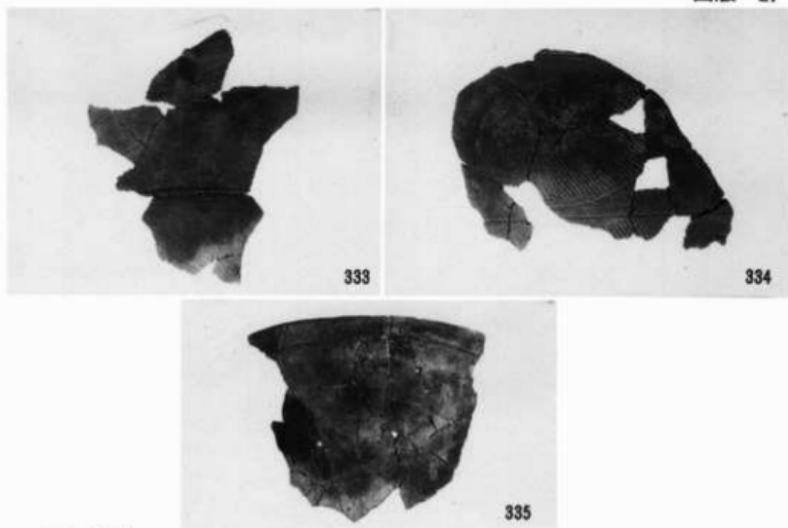
314

出土土器

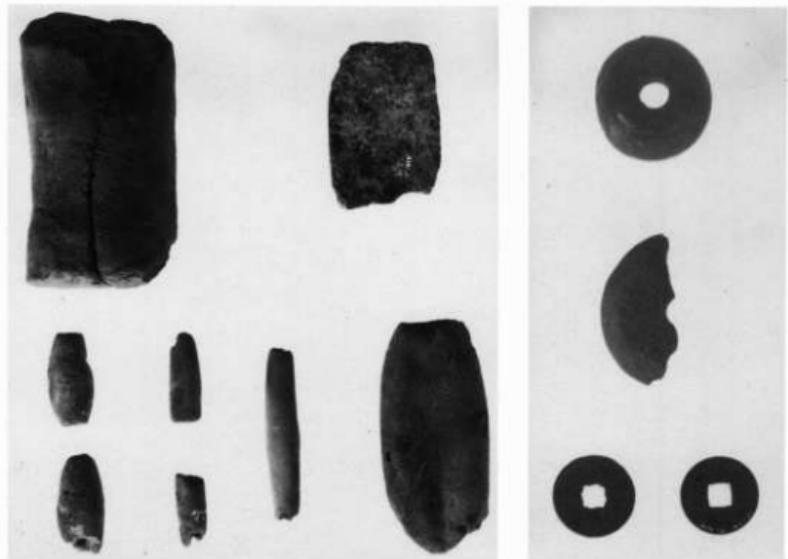
図版 26



出土土器(墨書)



1. 縄文式土器



2. その他の遺物

八日市場市平木遺跡

—県立海匝地区(仮称)養護学校建設に伴う埋蔵文化財調査—

印刷 昭和63年3月25日

発行 昭和63年3月31日

発行 千葉県教育厅施設課

千葉市中央4-13-28

財團法人 千葉県文化財センター

千葉市葛城2-10-1 0472(25)6478㈹

印刷 ウタナベ印刷株式会社

千葉市弁天町276 0472(56)6741㈹
